

第十編 人物史

第一章 歴史上の著名な人々

谷山五郎隆信

わが国史を顧みるものは神武創業、大化改新、明治維新と共に建武中興をもつて国本の大宗としている。建武中興における吉野朝の史実にはわが国体の精華を發揮するものであり、九州においてはわが谷山五郎隆信が、後醍醐天皇の第九皇子で西征將軍として遣わされた懷良親王を谷山に迎え、宮を御所ヶ原に奉じ谷山城(別名千々輪城)を本拠として薩隅日の宮方南朝側の勢力を扶殖し錦旗の下に武家方(北朝側)に対抗し、ここに約六か年の間、征西府が置かれ、谷山五郎がその中心となつて忠勤を励んだのである。

谷山氏の系図にはいろいろな説があつて明かでないが、谷山を領して谷山の地名をとつた谷山忠光を祖とするのが一般の見方である。以来、五郎隆信に至るまで四代は谷山郡司となり、また祖忠光以来谷山の地領に関して島津氏と大訴訟問題を起こしたことも歴史上有名である。五郎隆信の生年月日は明らかでないが、だいたい後二条天皇の時代であり、郡司を継いだのは建武元年(一三三四年)十二月となつている。懷良親王が薩摩津に上陸されたのは興国二年(一三四一年)五月一日であり、まもなく御所ヶ原に入御あらせられると、令旨は薩南の宮方はもとより、大隅、日

向、肥後の官方にもただち齎もたらされた。これから懐良親王を中心とする確執抗争は中世期におけるわが三州史に精彩を放つものであり、谷山五郎隆信父子と島津貞久勢とは谷山の諸城や牛落して対峙して激戦が行なわれ、奮戦が続いた。

これらの記事は諸書に明らかであり、また本書の中世編にもくわしく書かれているので、ここでは割愛することにする。



谷山五郎隆信

もと寺後の菩提寺びつじにあったが、後に皇徳寺にうつされたともある。子の忠高は晩年仏心と称して入道し、父の菩提を弔ったと伝えられる。いずれにしても、終焉の地の判明しないことは遺憾である。

征西府跡の御所ヶ原には、大正八年時の村長佐藤清光が村議及び有志にはかり「西征將軍宮懐良親王遺跡顕彰碑」を建立し、その除幕式が大正十一年十二月盛大に行なわれた。また郷土出身の大勲位松方正義公の義捐によって、懐

良親王を奉祀する谷山神社（県社）が昭和三年九月慈眼寺山上に創建され、忠臣谷山五郎隆信もその境内に摂社として奉祀された。昭和三年、今上陛下鹿兒島行幸の折、五郎隆信にはその忠節を嘉し給いて正五位を追贈された。

赤崎海門

南麓の土門馬場の出身、徳川中期における鹿兒島の生んだ偉大なる儒学者。元文四年（一七三九年）—享和二年八月二十九日（一八〇二年）。通称を源助、諱を偵幹、海門はその号である。家貧なるも少時より学を学び、のち鹿兒島西田の片馬場に住し、ここで山田月洲について学問を励んだ。常盤町に赤崎殿屋敷と伝えられる所が残っている。月洲には、山本秋水と赤崎海門らの弟子があり、このふたりは藩校造士館の教授となり朱子学の振興に努めたのであるが、海門はこれよりさき熊本にも行き、藪孤山について三年の間教を受け、学徳大いに進んで天明三年藩公島津重豪に認められ、まず造士館の助教から教授に進み、館長の山本秋水正誼をたすけて教学と人材の養成に尽力した。また世子斉宣公の待講ともなつて朱子学を講じ、さらに江戸藩邸に出仕して公に大学衍義を講じた。そのときよんだ歌に

みがけ猶君が心のますかがみもとの光のあらはるまで
また日新公の「いろは歌」を講ずるに

学べこの遠つみ親の言の葉の花も実もある道の姿を

と詠んでいる。さらに世衰え人心のまめならざるを痛み嘆かれたときに

君よ先麻とならば民草にまじる蓬も茂りはてまし

いにしえに吹き返さなん国の風人の心のちりをはらひて

の歌を献じている。

寛政七年江戸から鹿児島に帰り、再び造士館の教授となったが、同十二年頼春水らと共に徳川幕府に迎えられて、有名な幕府の昌平黌の教官に抜てきせられた。昌平黌は当時の最高学府で、林羅山とか佐藤一斎とか荒川秀山とか天下のそうそうたる大学者が教官として出ており、赤崎海門もその一峰をなしていた。海門は程朱の学を宗とし、つねに「程朱の道は孔孟の道、孔孟の道は堯舜の道」と唱え、異学を退けて柴栗山らと共に室鳩巢の学風をとるとび、醇正にして奇矯ききょうを避け実学を重んじた学者であった。

また海門は、漢詩に長じ、国学にひいで、歌もよくした。県立図書館の近世薩洲群書一覧の中に「海門紀行」「海門遺稿」「かりねの床」「心の春」が見られる。海門には頼春水（山陽）や柴栗山と特に親交があつたが、高山彦九郎とも交わりが深かつた。寛政四年に彦九郎が薩摩に入つて、まつさきに会つたのも海門であつた。海門が彦九郎を喜び迎えて

旅衣はるばる問ひしうれしきは包むたもとにあるとぞ知れ
と詠めば、彦九郎も次のように返歌している。

知る人の知るぞうれしきはるばると尋ねし山のかひそありける

なお海門の遺稿には、辞世の歌とも思える一首と、海門を悼いたみての詠み人知らずの一首がある。これを示すと
はつ瀬山峰のかなたに月落ちて雲井にひびく暁の鐘

長かれと祈りしものをいかなればみじかく絶へし人の玉の緒

亭和二年春病を得て儒官を辞したが、辞任に銀十五枚を賜わり、病篤きに及んでは帖佐村鎌田の内三十石を与えられた。享年六十五才、墓は東京芝高輪の大園寺にある。嗣子貞一は後に造士館の講師となったが、帰鹿に当たり父の遺髪を南林寺墓地に分葬した。

是枝柳右衛門

下松崎の出身、商人出の幕末勤王志士。文化十四年（一八一七年）三月十五日―元治元年（一八六〇年）十月十三日。父は仲兵衛貞兼、母は四元氏、平朝臣とされているが、代々庶民として商を営んでいた。柳右衛門は諱は貞至、号

を臥牛山人驛角しんかくまたは雖無すいぶと称した。家貧にして十五才の時一家は大隅の串良の波見浦に移り、まもなく高山に移って三十二才まで大隅で暮らした。この間、天びん棒をかついで魚塩を売り歩き、父母を養いながら余暇には瀬戸山白菜に俳句を学び、あるいは元林に鍼灸術きゅうを習ったが、向学に燃える柳右衛門は夜間に宇都宮東太の東学院に通い、和漢の学はもとより歌道にも精進した。この学問は大いに進み、東学院一千人の門弟中第一人者となり、他に見られない水魚の交わりも師弟の間に結ばれた。



三十二才で谷山に帰ると、下松崎に塾を開いて町の子弟を教えたが、時あたかも幕府の失政と黒船の来襲によって天下は風雲を告げ、尊王攘夷のために奮起すべき時が来た。柳右衛門は「異国人に対する意見書」や「海防急務論」を書くと共に、鹿児島城下の勤王志士と国事を談じた。庶民の身をもって武士と交わることは容易なことではなかったが、まず美玉三年を始め精忠組の面々に近づき、また家老島津久徴の知遇も受くるに至った。柳右衛門の最初に計画したのは、徳川幕府の井伊大老の暗殺であった。これは藩に相談し、あるいは藩の同志と事を共にすることはできないので、单身壮途に上ることとし、胸に斬奸状を抱いて三十五才の時に谷山を出た。

日向の細島まで行くと、ここで桜田門の変を知り、おくれを取ったことを口惜しがった。しかし、このまま引き返すべきでないの旅を続け、行く先き志士を尋ね、あるいは伊勢神宮に参拝して、目ざす京都に入った。京都では全国の勤王志士の集まる田中河内介の臥竜窟を訪れた。河内介は中山大納言の腹臣であり、大納言の娘慶子の局は明治天皇の御生母である。こんな関係から全国の勤王志士が河内介を通じて朝廷に近づかんとしていたのである。その数多い勤王志士の中で、柳右衛門と河内介は特に意気投合して義兄弟の約を結んだ。そして、河内介の案内で柳右衛門は中山大納言父子に親しく対面を許されて国事を談じ、大納言は柳右衛門の誠忠に感動し朝廷からの御下賜品の数々も与えられた。

錦を飾って帰国した柳右衛門は、また長崎における攘夷の急務なるを感じて、長崎におもむいて情勢を探ると共に帰国して攘夷の準備を進めていた。しかるに上方においては和宮の降嫁問題が起り、これでは徳川の勢力を増すことになるというので、和宮降嫁阻止の上書を携えてただちに京都に上った。この上書は迂余曲折を経て、中山郷の手

から上奏せられた。やがて右大臣近衛忠熙公からの呼び出しがあり、柳右衛門は衣冠束帯を与えられて公と対談した。上書の趣について柳右衛門は、薩摩から勇士を率いて京都にはせ、淀と伏見の番所を襲いただちに二条城に踏み込ん



隼人の薩摩のこらが劔たち
ぬくとみるより楯は砕くる

貞至

で酒井若狭守の首を挙げ、さらに月輪殿に迫って佐幕派の九条閑白を責め、降嫁解約の御書を主上に奉り関東にもその御書を下し給わるよう取り計ると言上した。近衛公は痛く感激して「皇国の大事いまは汝なんじが一身にかかるぞよ」と仰せられ、柳右衛門はその決意のほどを「薩摩潟とほき堺にありとても御先を人にゆづるべしやは」の歌を、献じて答えた。それから三日たって、近衛右大臣からの墨付が水野監物によって届けられた。

宜旨 是枝貞至 宜令叙従六位下任隼人介

文久元年三月十五日 右大弁藤原胤保 奉

柳右衛門の第三回の京都上りは、島津久光公の江戸参府を京都に要して、討幕の実践運動を挙げんとするにあつた。これは、薩摩の同士討ちに終わった史上有名な寺田屋事件である。この義挙に加わった薩摩の勇士は三十六名で、

伏見の寺田屋に有馬新七、柴山愛次郎以下三十数名が集まり、この中には谷山の大脇為政もいた。柳右衛門はその時脚部に付骨疽を病んで歩行自由ならず、同志は柳右衛門の出陣を止めたのであるが一向に聞き入れず、一足おくれで駕籠に乗って京都の臥竜窟に入った。なお大阪を出るとき、かねて預っていた青蓮院宮からの錦の御旗は原道太に托して臥竜窟に届けしめることにした。討幕実践の第一着として寺田屋はその先陣であり、臥竜窟は参謀本部であり、かつ長州や土州や雲州の諸兵がたむろしている本陣であったのである。柳右衛門はこの本部にあつてさい配を取つたのであるが、寺田屋事件後も京都にとどまつて寺田屋事件関係の薩藩士や河内介の助命方について久光公側近の大久保一蔵に書翰をもつて交渉したのであるが、かえつて捕えられてついに屋久島に遠島謫居たくきよの身となつたのである。

屋久島の安房に幽囚の生活を送りながら島の子弟も教育していたが、家老小松帯刀が帰藩するやただちに赦免の令を出し、柳右衛門はことに青天白日を仰いだ、極度の疲労のために四十八才をもつて「よしさらば風にまかせむ桜花わがみ世にふる色をつくして」の辞世を残して散り果てた。墓は安房と谷山の円明庵にある。円明庵の墓碑には「勤王堂赤心報国大信士」の法名と、辞世の歌などが刻まれている。

さて是枝柳右衛門は、藩のバックも無ければ金も無い一介の町人で、幕末の勤王志士としては全国に類例を見ない存在で、中央で活躍した偉丈夫である。靖国神社にも県の護国神社にも祀られているが、明治二十四年十二月十七日に天皇陛下より特旨をもつて従四位を追贈されている。また柳右衛門はただに勤王の志士であつたばかりではなく、町人としてこれほどの学文を深めた人も全国に珍らしく、和歌も数百首残り「隼人の薩摩のこらが劔たち抜くとみるより楯は砕くる」のごときは人口にも最も膾炙かいしやするところであり、歌人川田順は柳右衛門をもつて明治維新志士中で

の最大の歌人と折紙をつけている。俳句もよくしたが、長歌に詠んだ愛国の至情や、数え歌の勤王節は懦夫だふをして立たしめるものがあり、さらに弟の貞尚に与えた遺訓のごときも傾聴に値するものがある。なお柳右衛門には「羈中浮草」「志天之友」の日記があり、貴重な文献となっている。翁の出身地たる松崎には、大勲位松方正義の題字に成る「贈従四位是枝柳右衛門君」の顕彰碑が建っている。昭和三十八年は翁逝いて満百年にあたるので、黒木弥千代らの主唱で奉賛会を作り、御命日の十月十三日福祉会館で盛大な百年祭を催うした。県下から約三百の名士が集り、遺族も和歌山県田辺市から参列された。この祭典には県の内外から賛助金が集り、特に靖国神社からも異例の賛助金を送られてきた。なお祭典には、黒木弥千代作詞、安田幸吉作曲の薩摩琵琶「勤王志士是枝柳右衛門」が演奏せられた。是枝柳右衛門の伝記については、伊地知茂七著「贈従四位是枝柳右衛門翁之伝記」と、百年祭を記念して出された黒木弥千代著「幕末志士是枝柳右衛門」があり、琵琶歌の作詞も載っている。

松方正義

両親は共に谷山、明治時代の大政治家、大勲位公爵。天保六年（一八三五年）二月二十五日―大正十三年（一九二四年）七月。幼名を金次郎と言い後に三之丞に改め、長ずに従って正義と称した。十一歳で母を失い十三歳で父を失ったので、一時長兄の清蔵に頼るほかなかった。生まれた場所が鹿児島市下荒田の松方家で、ここで育って松方家を継いだ。従って一般には松方公を鹿児島市出身としているが、実は両親は生粋の谷山人であり、両親が夫婦のまま松方家を継ぎ、正義などを設けた後はその子供を松方家に残し、両親は谷山に帰ってもとの松田姓に復している。正義の父の松田善蔵為親（正恭とも言う）は南麓の町口松田殿の松田為政の第二子で、坂之下の和田名に分家していた者で

ある。正義の母は南麓の士門馬場の郷土山下角兵衛の長女の袈裟けさ子夫人で、松田為親に嫁した。家が貧しかったので夫婦で松方家に養子に入り、その後夫婦は和田名に帰ったことは前述の通りである。こんな次第で、徳富蘇峰の「松方正義公伝」にも正義は松方氏別家第一代となっており、松方家に生まれ鹿児島市で育ったが、両親の関係から正義は谷山ツ子である。両親が谷山人であるので、彼少年はいつも〈谷山芋〉と渾名あだなされて仲間から外はずされていた。後に立身出世されて故国に帰られても、谷山を故郷として近親の者に親まれていた。

正義は幼少の頃は虚弱で憶病者でもあった。それに九歳の時には瘡瘡も患ったが、その後体質一変し両親に似て剛健な性格となった。そして弓技、剣道、馬術にみずから励み、その妙技は斉彬公の目にも留とどまって芭蕉布など賜わり、その後は〈あの奴〉と御意に入った。それから十六歳で御勘定所勤務を振出しに、久光公の側近にも仕え、生麦事件や薩英戦争にも関係し、幕府の征長には薩察となり、一面には西郷、大久保の指導を受けて尊王討幕を助け、特に大久保の寵愛するところとなって、他日明治の新政府に登用の道が開けていった。

これより先き、正義は長崎において市民を救い、あるいは英仏の領事と交渉して維新政府の貿易を継続せしめ、あるいは天草の浮浪の徒を鎮めたが、大久保の推薦によって日田県（大分）知事に任ぜられ、正義は政府の借款十万兩を調達するのほか、民生、産業、教育にも大きな功績を挙げた。それから中央政府に迎えられ、民部大丞から大蔵権大丞、租税権頭から租税頭、大蔵大輔に進み、さらに地租改正事務局長となり、大久保総裁を輔佐して永久にかがやく偉業たる地租改正を大成した。この功績は、山県陸軍卿が士族を廃して国民皆兵主義を採り徴兵令を施行した功績と共に、明治の政治史に偉彩を放つものである。次に特筆しなければならぬ功績は、大蔵卿として財政の衝にあたり、

維新以来の一大病根であつた不換紙幣の回収に着手して、兌換制度の基礎を確立したことである。そして明治十五年六月日本銀行が設立され、正貨準備による兌換券を發行せしめて、今日みるような貨幣制度をほぼ築き上げた。もつとも当時の正貨は銀貨であり、これでは世界貿易上の決済に支障もあるもので、金本位制が望まれていた。時あたかも日清戦争の大勝によつて五億の金貨で償金として領収されることになつたので、これを機会に明治三十年金貨単本位制に切り替はられて、ここに貨幣制度は完成した。由利公正、井上馨、大隈重信も幣制改革の功勞者であるが、わが松方正義は殊勲最大、その功績は後世に永く伝うべきものである。

次に、松方正義の大臣歴を見ると、明治十八年の第一次伊藤内閣に大蔵大臣、続いて黒田内閣、山県内閣に大蔵大臣。明治二十四年五月には松方内閣を組織して、総理大臣兼大蔵大臣、同二十九年九月にはまた内閣を組織して総理大臣兼大蔵大臣。三十一年十一月の山県内閣に大蔵大臣となつて北清事変まで続いている。明治三十七、八年の日露戦役には元老の一人として枢機に参画し、桂内閣を輔けて専ら戦時財政に尽力した。日本海戦の勝報が九重に達するや、天皇は「是れ松方が戦時財政に尽瘁したる結果である」と宣ひ、大勲位を賜わつた。また松方公は枢密顧問官として陛下の諮詢に答え、ことに公が大正六年以来老軀を提げて内大臣の重職を任じ、匪躬の誠を尽くされたことは晩節を飾る最後の御奉公であつた。

内大臣の重職にあること三年、老齡衰弱のため屢々骸骨を乞われたが聴許にならず、かえつて優渥なる勅諭を賜わつた。大正十一年九月に至つて辞表は始めて允許せられ、「依勲功特陞叙公爵」の御沙汰書を賜わり、さらに「朕、正二位大勲位公爵松方正義を待つに大臣の礼を以てし、茲に元勲優遇の意を昭にす」との勅諭を下された。大正十三



年七月公の病草あたらまり危篤の旨天朝に達するや、特旨をもつて従一位に昇叙し、両陛下は徳川侍従長を遣わして病を看せしめられた。公の薨こずるや貴衆両院は弔詞を議決し、越えて十日勅使松浦子爵は松方邸に祭糝料、幣帛、神饌を供え、さらに左の誄詞るいしを宣読せしめられた。

誄詞

松方正義

蚤ハシニ身ヲ国事ニ委ネテ利用厚生ノ業ヲ勤メ責ニ財政ニ膺リテ金融機関ノ統一ヲ致シ兌換ノ制本位貨ノ策亦咸爰ニ定マル国家多事ニ際シ通済礙無ク円

融能ク弁スルモノ其ノ勲勞偉且宏ナリ再ヒ洪鈞ヲ乘リ又常侍輔弼ノ職ニ就キ晩節愈々頭ハル寔ニ兩朝ノ元老一世ノ老宿タリ今ヤ□亡ス曷ソ軫悼ニ勝ヘム茲ニ侍臣ヲ遣ハシ賻ヲ齎ラシテ弔セシム

越えて七月十二日芝三田本邸において国葬の礼を以て厳かに式が行われた。

以上は松方公の経歴の大略と功績の概要であるが、詳しいことは昭和十年七月発行の公爵松方正義伝記編纂会の著者徳富猪一郎（蘇峰）の「公爵松方正義伝」の乾坤二巻の二冊に明かである。ただ最後に一言しておきたいことは、谷山の御所ヶ原を西陲無二の聖跡として「西征將軍宮懷良親王遺跡頭彰碑」や、慈眼寺山上の谷山神社の創建は、

松方公が自ら資金の大部分を投じてできたものであり、是枝柳右衛門顕彰碑の表題も松方翁の揮毫きじょうに成るものであつて、常に郷土の事も忘れなかつたという一事である。谷山では松方翁の遺徳に答え奉るために、大正十五年十一月谷山神社の境内に「大勲位公爵松方正義頌徳碑」が建てられている。

第二章 先覚者と有名人

川畑半平清真

辺田の出身、辺田地方教化指導の先覚者。文化五年（一八〇六年）五月二十三日―明治五年（一八七二年）四月十七日。俗称を半平と呼び、人々は後に半平翁と尊称した。父の清堅は幕末時代における有識者で、半平もその血を承けて幼時から学を好み行を慎み、聖賢の書を楽しむかたわら弓術、医学をも学び、また歌道や華道にも長じていた。人呼んで谷山聖人とし、師事する者多く、教化四隣におよんだ。

元来、辺田は薩藩時代に兵具方として城下の直属地であり、記録に残るものとしても薩英戦争、京都蛤御門の戦、戊辰の役、西南の役、台湾征伐に辺田から幾多の勇士を出している。これは辺田学館（後に辺城学舎と改称）に教鞭を取られた半平翁の教化にも依ることよが大である。翁はさらに教育を士族のみの学問に止めず、庶民にも学問の要ありとして、明治五年に士族平民合同の白山小学校を設立した。これが今日の中山小学校の前身であつて、明治五年の創立は県下ではもちろん、全国でも珍しい。群馬の人長坂吉太郎が明治の初期に辺田村落の美風を讃えたものに

左の七言絶句がある。

辺田村落俗風清 夙設学堂既有名

未聞流青年惡風 唯聽比屋讀書声

半平翁にはいろいろ逸話や佳話が残っているが割愛することとし、ここでは涙橋の墓碑に刻まれた薩摩の碩学今藤宏の撰文を掲げるに止める。

川畑君墓碑銘 (原文は漢文)

川畑君諱は清真俗称は半平父諱は清堅鹿児島県谷山人なり君は文化五年生明治五年夏四月十七日卒享年六十有五本邑中村に葬る君少より学を好み老に至るも倦まず平生忠孝を重じ礼法を守り言動苟もせず自ら奉ずるに甚だ薄く人を待つ必ず恩意を尽す常に自ら言う吾終身守る処は唯恕のみ故に親戚朋友皆その徳に服せざる莫し谷山に学校を設くる皆君の議に依る生徒百余人君親しく之を教督し未だ嘗て倦色あるを見ず嘗て人に語りて曰く壯士捐生戰場に於て報国す我既に老て所用する無く世に唯後生を教育し以て国家の用庶に供し少しく国に報いんと其疾を得るや子清貞東京に祇役す家人之を召さんことを乞う君聽ずして曰く忠孝豈両全を得んや吾に女子有り死するも其手にて復た恨む無し君の卒するや其門人手島白石等の諸子亦皆東京に在りて其計を聞き之を痛惜す遠く金を諸友に托し以て碑を営み且つ曰く願くば今藤悔堂の文を得て以て師の墓に誌さんと是に於て其友人松脇玉利手島等来りて銘を乞う余その志を感じ乃ち其状を抛し以て此系を書す 銘に曰く 世衰道微 邪說紛起 師道斯衷 郷無善士 維君興学 後生服教 風俗丕変 絃誦盈校 古原之上 一片之碑 銘詞深刻 不朽更垂

なお、大正八年九月には門弟により川畑半平清真翁頌徳之碑が辺田学館の跡に建てられた。題字は正六位勲四等山下秀実の書に成る。

平 田 宗 質

北麗の出身、郷士で思想的な先覚者。弘化四年（一八四七年）—明治十六年（一八八三年）二月十四日。幼名を才次郎通称を才七と呼び、父半五兵衛盛徳の二男である。薩英戦争に十七才で出陣し、祇園洲の防衛にあたり、続いて慶応二年には藩命によって京都守護に任じた。そして同四年には仏人から砲兵半坐の操法を学び、明治元年島津久光の上京には衛兵となり小頭から常備隊伍長に進み、次いで近衛兵に転じた。時に明治四年近衛隊において城下と城外の士族間に軋轢あつれを生じ、宗質は大山綱介、田中直哉、柏田盛文らと共に時の山県陸軍卿に建白書を呈した。これはかえって山県の怒を買ひ、宗質らの郷兵は帰国の止むなきに至った。

谷山に帰った宗質は、明治七年に郷校の教師となつて子弟を教育し、またかつて上京中フランス語を修めていたので子弟に始めて洋学も授けた。しかし郷校経営に資力乏しく、養鶏や櫓木製材を試みたがこの事業も失敗したので、郷校を退くのはかなかつた。そこでふたたび東京遊学の途に上り、今度は中江兆民の仏学塾に入り、仏語を究むると共に法律政治歴史哲学を修めた。この塾には当時二千人の門弟が集つたといわれるが、君は秀才で嶄然頭角を顕わしていた。また谷山の子弟数人を東京に呼び、学資の乏しい者には、自ら勉学のかたわらフランス語の翻譯によつて陸軍士官学校から得た金を与えていた。明治十年西南の役の起る直前、宗質は一書生の身をもつて警視庁の県出身警官と共に鹿児島に入り、私学校の動静を探ることにしたが、一行二十一名は西郷暗殺団と誤認されて捕縛投獄の憂き目



西郷暗殺団と誤認された一味
 明治十年 3月10日 出獄後東京最後撮影

(後列右より)

(前列右より)

- | | | | |
|-------|------|------|------|
| 菅井誠美 | 伊丹親恒 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 猪鹿倉兼文 | 高崎親章 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 野間口兼一 | 松下兼清 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 土持高 | 西彦四郎 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 樋脇謙介 | | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 前田素志 | 市原尚雄 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 安楽兼道 | 川中直哉 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 山崎基明 | 高橋為清 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 野村綱 | 大山綱助 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 末弘直方 | 柏田盛文 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 平田宗質 | 菅井誠美 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 寺原長輝 | 伊丹親恒 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 猪鹿倉兼文 | 高崎親章 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 野間口兼一 | 松下兼清 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 土持高 | 西彦四郎 | 菅井誠美 | 菅井誠美 |
| 樋脇謙介 | | 菅井誠美 | 菅井誠美 |

菅井誠美と平田宗質は谷山出身。(野村綱は同志と関係なきも単独にて捕縛さる)

に会った。後に救われて出獄帰京しているが、前に示す写真はいわゆる西郷暗殺団の一味で、中央に立っている偉丈夫が君の面影である。前列向つて右より六番目が谷山出身の菅井誠美（人物伝は別に掲ぐ）、その右隣りが柏田盛文、右端が中原尚雄、後列から二番目が後に警視總監となった喜入出身の安樂兼道である。これらの中に一書生の君が中央に颯爽として人目を引いているのは全く偉とするに足る。

平田宗質は人となり磊落不羈で権勢に媚びず、貧苦を卑まず淡懷よく人を容れ、また攻学研究に努めると共に有為の人材を養成するをもつて天職とし、さらに民権の伸長と国運の發展を計るをもつて自己の任務とした。まさに一代の先覚者であり、処士であつた。頃は板垣退助、中江兆民の自由民権の思想が若者の間に強く呼ばれ、平田も卒先してこれを謳歌し、進んでは立憲政体による機会の創設を希図して止まなかつた。そして心ひそかに、しばらくは在野党の領袖をもつて期するところがあり、先輩知友から仕官を奨められたこともたびたびあつたが、これを断り民間志士をもつて任じていた。平田の友人には知名の士が多かつた。官にありては安藤則命、大山綱昌、猪賀倉兼文、大山綱介、柏田盛文、安樂兼道などと常に往来し、野にありては中江兆民、矢野文雄らの有名人と親交があつた。著書については明かでないが、かつてガンベッタ伝を翻譯したことがあり、上梓に至らずして病に倒れた。享年わずかに三十七才、君に籍するに寿をもつてしたならば明治中期の政界大立物として、また思想界のリーダーとして巨歩を印したであらう。

波 平 行 安

もと大和の国の刀匠、薩摩の国谷山に入りて波平刀劍の始祖となつた名工。永延頃（九八七年）の人で、大体安和

元年（九六八年）から長元元年（一〇二八年）までの人とされている。谷山に入ったのは長保元年（九九九年）頃であるが、まず大和から薩摩に下るについては、薩摩は武の国で刀剣の需要が多いことに目をつけたこと、次になぜ谷山に鍛冶場をおいたかについては、優良な砂鉄が谷山の海岸から得られ、椎や栗など良質の木炭が近くの山から多量に得られ、また新鮮な魚が食べられるからということになっている。

本名は正国で、竜王と銘打った刀もあるが、波平行安をどうして名乗ったかについてはいろいろな挿話がある。妻子を大和国から取り寄せるために、谷山を船出してから途中暴風雨に会って、船はいまにも沈没しそうになった。正国は「私の打ったこの一刀を海神に捧げます故、何卒風波を和げ給え」と海中に一刀を投ずれば、風波は一波毎に静まっていった、とある。それから正国の居住地を波平と呼ぶようになり、正国も晩年は行安と名を改めたと、波平系図の橋口家に伝えられている。後世の作品の中にも、始祖にあやかかって「波平行安為海上安全鍛之」と入銘の刀もある。

正国が一時大和に帰ると「薩摩に下り一段と上達せし由、帝の御剣を打ち奉るよに」との御沙汰があり、正国が一条天皇の御剣を打ったことは有名である。なお三条小鍛冶宗近が罪を得て薩摩に流され、谷山の三重野において正国の鍛冶弟子になったという一説もあり、その碑も三重野に建っている。橋口家伝によれば「炭の出る三重野に砂鉄をここまで運んで鉄を吹き、さらに刀の下鍛えまでして波平に持ち帰ったという。波平地区には皇紀二千六百年記念に「波之平刀匠之遺蹟」の碑が建っている。

刀匠橋口正国が谷山に住してから波平行安と称し、明治初期まで凡そ九百年六十四代におよび連綿として刀匠を続けた。かくのごときは全国の刀剣史系譜において他にその例を見ないところであって、この間また幾多の名工を出し

ている。二代行安も数ある名工の一人で、愛知県猿投神社に国宝として保存されている。(口絵の写真の刀) 三代行安も名工で、ある大名の差料として、相州正宗と波平行安には優劣がつかぬほどであったという。なお三代行安については「笹貫きの太刀」としての秘話が残されている。この笹貫の太刀は、樺山家から現在磯の近藤竜三郎の秘蔵になつているが、国宝に価すると、東京の専門鑑定大家が激賞している。古、中、末の波平系は五十五代で、右に挙げた名工のほかにも有名な刀匠が続出している。

新刀波平系においては五十六代にあたる安張をもつて筆頭に推す。すなわち安張は波平中興の主、または新刀波平の祖として有名である。彼は石見守を受領し、後に入道して寿庵と称した。安張は波平から坂之上に移住してここで刀を鍛え、波平には三郎兵衛安行を残してここを本家と称した。この五十七代安行は大和守で非常な名工、墓は松林寺にあつた。坂之上には寿庵松の碑が残っている。(福永酔劍著「薩摩の刀と鏢」昭和四十年九月発行による)

八木主水佑元信

錫山鉾山を発見して開発した島津氏の御家人。元和元年(一六一五年)十月十五日―寛文十一年(一六七一年)六月二十七日。八木氏は桓武平氏の流れの一つで、薩摩に入ったのは建長四年(一二五二年)とされている。爾後代々島津氏の御家人として、連綿およそ七百年におよんでいる。主水佑元信が錫山鉾山を発見したのは、彼が四十歳の時で、今を去る三百余年前の明歴元年(一六五五年)乙未十一月十五日である。鉾山は初め八木元信の自力をもつて開発され、苦心惨憺してしだいに実績を挙げ、時の島津藩主第十九代光久公に運上銀(鉾山税)を奉つていた。しかるに、その後元禄十四年(一七〇一年)に至り島津氏の経営に移され、山野金山と共に島津藩の財政に大きく寄与した

ことは隠れもない事実である。

八木氏の運上銀については、発見者たる元信の十七ヶ年間の分は不明であるが、子の宗信の分は銀三百貫となつてゐる。この銀三百貫は金五千両に当り、金一両を玄米一石二斗に換算すれば六千石になる。これは宗信の三十年間の運上銀であるが、錫の産額の多かつたことを物語るものである。島津氏の経営に移つてから、文政十三年の錫産出高は四・七五屯、同十四年六・二屯、天保二年から同十四年までの合計高は一三八・三五屯で年平均一・一五三の正錫を出している。詳しいことは「錫山鉞山」の章にゆずる。

主水佑元信は文武両道を兼ねた人物で、藩主に仕えて御勘定奉行を勤めたこともある。墓は錫山の立神丘の麓なる西谷の墓場にあつて、安全院殿決盛淳壽大居士はその法名である。没後百五十年頃の文政時代に主水佑を神として祠が建てられ、昭和二十二年には区民相謀りて新たに八木神社を建立して三百年祭を執行し、また発見の地に記念の標柱も建てた。(安田敬蔵「さんぎし」誌上所載による)

有山 長太郎

硫黄島に生まれて谷山に住む、長太郎焼の初代にして名陶工。明治四年(一八七一年)三月二十三日―昭和十五年(一九四〇年)十月十日。君は幼少より手工芸を好み特に絵をよく書いていたので、陶画師郡山喜納太の門人となつた。郡山氏は島津家の磯御庭焼の画匠であり、この機縁で君も御庭焼に勤めた。しかし君は絵付加工だけでは満足せず、成形釉薬研究のため窯業の本場京都に修業に出ることにした。京都では原田陶工の門弟となり、錦手の絵の具および楽焼の調査を始め、粟田焼や清水焼の原土、成形、釉薬の秘法を学び取つた。

京都から帰国した君は孤島から両親を迎え、母の里なる脇田かまに窯すを据えんとする矢先き島津忠義公の御庭焼にふたび召され、古薩摩焼の研究に精励した。かくて明治三十一年京都の陶芸展覧会に島津公の推挽によって大花瓶一對を製作出品したが、審査の結果二万五千円の驚くべき評価を附せられると共に、宮中に献上され御嘉納の光栄に浴した。君はこれをもつて得々とせず、質弱き薩摩焼の改良と独創的生命の開拓を目指して御庭焼を辞し、明治三十二年頃谷山に移住して今の柏原に窯を開いた。当時君は赤貧洗うがごとく、君を世話しかつ支援した人は麓の池田良之助の母モト女史であつたという。

その後、帝国美術院長黒田清輝の疵護ひじを受くるに至つたのであるが、君の技量と企業には一起一伏常ならざるものがあつた。それにも屈せず、窯温度を八百度から千三百度に上げることに熱中して苦心を重ね、薪を買うために家財道具を売り、あるいは家の床板を剥はぎ柱を切ることもあつて、その難渋と苦心は陶工柿右衛門もおよばぬところであつた。かくして焼上つた作品は、窯変といい色沢といい、またその気品その雅趣その素朴、誠に神韻漂渺ひょうぼうとして無類の出来栄であつた。黒田美術院長はこの作品を推賞し、これに「長太郎焼」と命名されて登録録もされた。

長太郎は常に言う。「陶器は焼物であるから、その雅致風韻悉く焼き出すところに生命がある。徒らに彩管を加え色彩を施して粉飾するは焼物の本領ではない。原土の殺し方、釉薬の調合、火熱の上げ方、下



げ方の加減、火の止め方、冷し方に心血を注ぐが、最後は神の摂理によって生まれる。愛陶家と称せられる世の多くの人は形態、紋様、色彩等について鑑賞するが、土の味と火の匂いを愛する人は稀である」。実に長太郎焼には、油滴変、蛇虫変、辰砂変、針葉変、瑞雲変、閃光変、南蛮変、或いは赤銅、漆黑、黒褐、青錆などの色調変と、千種万様の変現に芸術品としての一大特色がある。君は人格高潔にして寡欲恬淡、敢て功業を誇らず、名人気質そのものに徹した陶工であった。氏人には九頭竜大権現を奉じ、神人一体、壺中の天地に生きていた。嗣子雅夫は第二代長太郎を襲名し、次子流石は三代長太郎として指宿に在りて、共に長太郎焼の陶工として令名聞えている。（初代長太郎については、谷山小学校長佐多峰太郎の「長太郎焼は斯くして生まれたり」の小冊子がある。）

第三章 官界で活躍した人々

菅井誠美

南麓の郷土出身、警察官より身を起して栃木県知事、愛媛県知事となる。嘉永二年（一八四九年）十二月十二日—昭和六年（一九三一年）三月十八日。菅井は旧姓を佐藤友輔といい、郷土佐藤平内の弟で、後に江戸の旗本の菅井家に養子入りして菅井誠美と改めた。明治初年江戸に出て警視庁巡查を拝命し、川路大警視に引き立てられて明治七年一月には権少警部に任ぜられた。明治十年の西南役の直前に官軍の間諜として鹿児島に下り、西郷軍の動静を探っていたが、西郷暗殺団と誤認されて投獄の上苛酷な拷問を受けた。時に菅井は権中警部兼陸軍中尉であつて、一団二十一人の中では平佐郷土末弘直弘、牛山郷土園田長輝、出水郷土野間口兼一、根占郷土松山信吾と共に権中警部の高官とし

て部下を率いていた。喜入郷士で後に警視總監となった安藤兼道はその時少警部であり、またこの一団の中には谷山の郷士中江弘学塾の書生平田宗質が加わっていたこともすでに記した通りである。

出獄後警視庁に復帰した菅井は次第に累進し、明治十二年二月二等警視補に、同十九年十二月には宮城県警部長、同二十四年一月には神奈川県警部長となった。それから三池典獄に転じたが、返り咲いて明治三十二年一月には愛知県書記官に挙げられ、同三十四年四月には熊本県書記官に転じ、翌年二月には警視總監官房主事となり、同年四月警視に任ぜられた。それから明治三十五年十二月三十日栃木県事に挙げられ、続いて三十七年一月二十五日愛媛県知事（高等官二等）に就任した。文官分限令によって現職を退いたのが同年十一月十七日であり、三十九年四月一日に勲三等瑞鳳章を授けられ、四十年二月二十日従四位に叙せられた。

わが谷山出身で県知事となった人は、菅井誠美ただ一人である。しかも菅井氏は警視庁時代から郷党の子弟を愛し県会議員となった長野武熊や教育功労者の平井政治などを東京の自宅に住まわせて勉学の世話をしていた。晩年には箱根の塔之沢に家を構え、請われるままに地元の町長にも推され、また東京に谷山会の開かれるときにはいつも老体をひっさげて出席しておられた。

川幡 清貞

辺田の郷士出身、皇宮警察長。天保七年（一八三四年）一月二十日―明治二十八年（一八九五年）四月二日。谷山の聖人とうたわれた川畑半平翁の長男、俗名を九之助と称していたが、姓は川畑を川幡に改めた。父の薫陶を受けて文武の道に励み、十五歳の時には琉球王子中山王に従って江戸に上ったことがあり、その後も藩命によって江戸に往

復すること五回に及んでいる。

戊辰の役には兵具第三番隊半隊長として春日艦にとり乗し、鹿児島を發して越後口ならびに奥羽地方の平定に従軍した。越後口の平定後はさらに函館追討に向い、阿波丸に乗って途中宮古湾に停泊中、幕府の咸臨丸が外国旗を掲げながら、故意に阿波丸の横腹に突込んで来た。両船共航行不能となつたので、上陸した咸臨丸の乗組員七十五名を捕虜として南部藩に引き渡し、君がその報告書も書いて出した。それから清貞らの官軍は陸路青森に急ぎ、さらに函館に渡つて五稜廓の戦鬪に参加した。明治維新となつて鹿児島でも兵制改革が行なわれ、四大隊の編成のうち君は第一大隊第六番小隊長に任命された。君は二十六貫の大兵で、南洲翁が「おまいの軍服はおいとガツツイジャ」とからかわれたことや、君が当時草牟田に住んで犬を飼ひ朝晩犬を連れていたことも南洲翁に少し似たところがあった。

間もなく東京に出て司法省権大警部に任じ、江藤新平の佐賀の乱には四番隊長として出征し、西南の役には八代付近の激戦に参加して勲功を立て陸軍中尉二等警視属に任命された。以来東京において消防司令副長、警視庁監獄本署長、石川島典獄、麴町警察署長を経て、明治十九年皇宮警察長に任命された。この間三回の天覽射撃に、そのつど優勝して天皇賞や掛軸を戴き、また明治天皇から皇居の上に舞い上つている鴉からすを打つよう命ぜられてみごとに射落とし、陛下から「君の母は喘息の持病ある由なればこの鴉を母の薬用に供せよ」との仰せもあつたという。君の最初の官舎は本所の一つ目にあつた警察の宿舎を改造したものであるが、この屋敷は杉山檢校（將軍侍医の按摩師）が昔住んでいた所で、屋敷も広く間数も多かつたので車夫や馬丁も住ませ、馬車で役所通ひしたものである。この宿舎はその後本所の大火で類焼したので、君は新たに地所を求めて麴町区中六番町に自分の家を建て、ここから皇宮警察に通



つた。時の宮内大臣伊藤博文を招待したのもこの家においてであった。明治二十六年三月官を辞して家族と共に帰国し、鹿児島市下荒田町に居を構えた。この屋敷は鹿籠屋敷といい、また喜入撰津殿の跡であったので喜入殿屋敷とも呼ばれていたが、二町歩もある広い屋敷であった。しかし安閑として暮すを欲せず、種子島に官地の払い下げを受けて開墾し、砂糖黍きびを栽培して製糖に着手した。時あたかも明治二十七年日清戦争の勃発となり、植え付けた砂糖黍を放棄して鹿児島に帰った。既に軍籍を離れ、齢も六十に達していたにかかわらず、百方奔走して従軍を志願し、許されて陸軍歩兵中尉の肩書をもって出征の壮途についた。かくして君は小倉におもむき、比志島支隊に属して出征した。首途の歌に

古いぬれと香りも色も若木にはゆづらざるべし山桜花

の一首がある。比志島支隊は台湾に渡り、澎湖島の竜門口と馬公城の占領に当った。君は奮戦中この地に流行していた風土病のコレラにかかり、勝利の講和を間近に控えながら野戦病院においてついに戦歿した。

新保利貞

五ヶ別府の郷土出身、警察官。嘉永六年（一八五三年）九月十五日―昭和二年（一九二七年）四月五日。父の善兵衛は利貞の生まれる直前に脱藩して京都に走り、母も縁を他に求めたので、祖母によって養育せられ、さらに叔父の

森喜平太の世話を受けた。十五歳にして志を立てて上京し、働いて賃金を得ながら夜は安井息軒の塾に通って苦学した。刻苦勉勵の結果明治八年七月警視庁の巡查となり、十二月には早や警部補となった。西南役の時は陸軍々曹も兼ねていたので、官軍の別動隊として従軍しかずかずの殊勲をたてた。明治十一年の明治天皇東北巡幸には供奉を申し付けられ、同年十二月に権少警部、十五年に大阪府警部、二十年に大阪府典獄、二十一年に香川県典獄課長に栄進した。

君は奇骨、仙骨の士で上官と議合わず、三十九歳の若さをもって明治二十七年官界を退いた。郷里に塾居するや郡會議員にもたびたび出馬して自治行政に携わり、特に県道入佐線の開通に努力した。七十五才で亡くなり、宇部口に葬られているが、警視総監や大臣を勤めた大浦兼武は君の友人であったという。

由来五ヶ別府なる所は、五ヶすなわち五家で古の郷保制による五家保ほいとされており、別府とは辺境の別符の意で特に守護地頭不入地の勅旨田とされていた。したがって、五ヶ別府は五家を保ほいする小邑で而も勅旨による賜田であったから、名家や旧家があつたわけである。新保家、森家、木藤家、本村家、駒走家のごときはこれである。ここで新保家の縁類を見ると、利貞の叔父森喜平太は火繩小銃及び弓術に長じ、藩の小銃指南役を勤めて天保山で城下の士に砲術を授け、谷山では上之段（宮川校の隣り）に射場を設けて麓や伊集院方面からの門人にも指南していた。喜平太の二男長保は黒田長官に従って北海道開拓に従事し、後に通信省に入つて局長を勤めた。長保の二男遠武勇熊は東京に在つて日本最初の新橋上野間地下鉄道の発起人となり、その技師長として令名を馳せた。

入佐清静

南麓の郷土出身、警察官となり後に福岡県内務部長を勤め、晩年には朝鮮の釜山に渡って漁業組合を作り入佐村を残した人。安政元年（一八五四年）―大正三年（一九一四年）八月。佐藤清操の弟であつて、小松原の入佐家に養子となつた。若くして東京に出て、警視庁に奉職して巡查となり、明治十年の西南役には陸軍少尉を兼ね官軍警察隊として奮戦した。西南役後は日本の各地を警察官として過こし、鳥取を経て福岡県内務部長となつた。当時の内務部長は現在の副知事に該当する高官であるが、君をここに招いたのは同じ南麓出身の先輩菅井誠美（前掲）であつて、菅井が福岡県内務部長を辞する時に君をそのあと釜に据えたのであつた。ところで、入佐は福岡県知事排斥の火中に投じ、知事も内務部長の君も共に桂冠した。

官を去つてから君は明治四十年頃朝鮮に渡り、釜山付近の漁業地に大日本水産会の漁業組合を作り、みずからその組合長となつて漁業の指導に當つた。そして、君は釜山に近い巨文島に住み、人々呼んで入佐村と称し、谷山の知人など此所に土地を求めんとする人もあつた。晩年健康を害し、福岡大学病院で治療に努めたが遂に六十一歳で死亡した。墓は南麓の多福庵にありて、大きな墓石に正五位勲四等と刻まれている。また、その墓前には石灯二基が献ぜられてゐる。菅井誠美や川幡清貞、あるいは山下秀実などを始め、明治の初期には谷山からも警察官として大成した人が多く、君もその一人であつた。

厚地政敏

南麓の郷土出身、県會議長を経て衆議院代議士。安政五年（一八五八年）一月九日―大正十年（一九二二年）二月

十一日。幼名を金二といい、父齊之丞の二男である。君の経歴の大体は墓碑銘に誌されている。これによれば「君は幼にして穎悟、弁論に長ず。明治五年八月志を立てて東都に学び、米人バラ氏につき外語を修む。次いで大学予備校に入り、大いに為すところあらんとす。適々病を得て郷里に帰り、青年子弟の指導を行ない士気の鞭撻に努む。後に



初代森山尋常小学校長となり、学風の刷新に当る。明治十三年県会議員に当選し、次いで常置委員となり、議長に挙げらる。明治二十五年二月衆議院議員に当選し、国政に参与すること三期間、晩年政界を去り、実業に従う。後年じん臓を病み、大正十年二月十一日歿す。享年六十二歳なり。佐藤氏を配して一男二女あり。「以下略」

鹿兒島県議会史によれば、議会開設の明治十三年二月に谷山郡から最初に県会議員となった者は本田親義であり、君が県議となったのは明治十六年一月となっている。さらに同年七月と同二十一年三月の県議選に当選して、県議三期に及んでいる。そして県会議長を勤めたのは、明治二十三年十月から同二十五年三月までで、第七代目の議長になっている。県会議長から代議士に出るのは大体の順路で、前議長の柏田盛文も代議士になった。君の代議士立候補は明治二十五年二月で、みごとに当選した、時に三十二歳の少壮代議士であった。当時の衆議院選挙は吏党と民党に分れて激しく争い、民党側には選挙干渉の重圧も加えられた。君は吏党側から立候補して三回の当選を勝ち得たのであるが、谷山で民党方を支持した者は北麓の海老原一派や町の是枝良左衛門、是枝権蔵らであった。

右に示す写真は、明治二十一年四月東京で写した二十九歳頃の面影で、代議士になる数年前のものである。君は長身にして風丰端麗、それにシルクハットを被つた姿には颯爽たるものがあり、また弁論巧みに而も高姿勢をとつて人々を伏服せしめたと伝えられている。帰郷後は木材業など営んでいたが意にまかせず、そのうち病魔の冒すところとなつて不帰の客となつた。

第四章 地方自治功労者

伊地知季治

南麓の郷士出身、初代の谷山村長で徳望と功績のあつた人。天保十一年（一八四〇年）二月三日—大正九年（一九二〇年）四月二十五日。季口の長男、五歳にして父を失い貧苦の中に育つ。二十六歳から三十歳ごろまで下級の郡見廻助、三十五歳ごろまで藩の常備隊調役助などを勤め、明治十一年学区取締谷山村担当を命ぜられ、次いで翌年十月に行なわれた公選による戸長となつて村政を司つた。戸長職にあること一年有余にして病氣のために辞し、全快後は有志とはかつて製糖事業を始め、あるいは農談会を設けてその事務を担当し、あるいは県勸業諮問会委員ともなつて、殖産興業方面にも関係するようになった。明治十八年の夏、谷山から喜入、今和泉の海岸一帯に板屋具がおびただしく発生し、漁民はただ濫獲するばかりで育成を講じなかつたので、季治はこれを遺憾として保護規約を作つて官庁の認可を得た。これは県下における漁業組合理約の先例を示すものであり、その翌年の解禁にははたして大獵となり、

その金額は七万円に上ったと伝えられる。明治十九年二月には鹿児島郡会議員に当選し、同年十月にはまた谷山村戸長の職についたが、そのころ谷山の稲作は数年にわたって螟虫がおびただしく発生し稲作はほとんど全滅にひんしたので、戸長であった季治はその害虫駆除にあるいは予防に、昼夜をわかつた寝食を忘れて農民を指導督励し、ついにこれが駆除に成功した。

明治二十二年四月新しい町村制の実施に当り、君ははじめての村会議員に当選し、続いて同年六月推されて谷山の初代村長となった。村長就任六カ年、農業に漁業に学事に、また公共事業に尽した功績は偉大である。その間赤十字社員委員ともなり、日清戦争には従軍者家族をみずから訪問し、私財を投じて慰問と救恤に努めた。また貧困家庭には金品を恵み与え、役場吏員にもねぎらいと寄付を忘れず、德行善事至らざるはなかった。その功績と人望は、真に一世の師表である。したがって、第二代村長佐藤清真は伊地知前村長に頌徳状を贈呈したが、このようなことはわが谷山においてはその後も他にその例を見ないことである。

また明治三十四年十一月には、さきに村長在職中の功績を認められて勅定の藍授褒章を賜わった。この藍授褒章は鹿児島県下における第一号であって、村民は脇田の境までおもむいて出迎え、その榮譽をたたえた。この褒章記の中には「克く地方制度の旨を体して自治の發達を図り、十七小学校を六校に併合して規模を拡張し、村有財産を整理増殖して教育の基礎を鞏固にし、殊に力を和田浜塩屋海岸堤防の修築及び板屋具の保護育成に尽し、以て裨益を沿岸住民に与えその他避病舎の建築に、害虫の駆除に、農事の改良に軌掌多年、諸勢整治、民情安輯す日々」とあり、これによつてもその功績をじゅうぶん知ることができる。(写真は歴代首長の頁に納む)

季治の子伊地知四郎は海軍機関少将であり、後に鹿児島市長や谷山町長を勤め、自治にも大きな功績を残しているが、軍人の部で小伝を掲げることにする。

長野 武熊

北麓の郷士出身、十有三年の県会議員。明治二年（一八六九年）一月二十八日―昭和十年（一九三五年）六月三十日。傑物の父祐通の長子で、若くして上京し、郷土の先輩菅井誠美の宅に書生となり、慶応義塾に学んで業をおえた。わが谷山から慶応義塾に学んだ者は、君をもつてはじまりとする。性、豪放果敢で談論風発、時の人を畏敬させるところのものがあり、人の下風に立つことを好まず仕官することを潔しとしなかつた。明治四十年九月三十九才をもつて県会議員に出馬し、以後当選三回十有三年の間県政に参画し、この間参事会員として県政に重きをなしてかずかずの功績をあげた。県議をやめるにあたって、ある代議士が君を県の総務部長にあつ旋しようとしたが、知事に推薦するなら引き受けてもよいがと、君ははねつけたとも伝えられている。

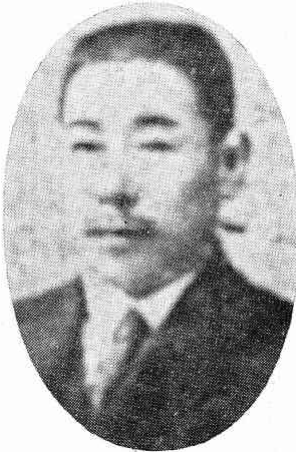
晩年に君は谷山町信用組合の創設にあたり理事長ともなり、また乳牛を飼育して牛乳販売を営んだことは人々の記憶に新たなところであるが、君が谷山に残した事業としては県議在任中に、名越高繁を事務担当者として、東麓松ヶ原の宅地造成を遂行したことである。当時は耕地整理の名目になっているが、今日で言えばりっぱな市街地計画であつて、道路も縦横に正しく構築されている。



福留彦七

中の出身、県会議員として、また競馬の飼育や骨粉業でも有名な人。明治九年（一八七六年）五月九日―昭和四年（一九二九年）十一月。福留氏は中の素封家で、後に瀧下^{のち}に水車を設けて骨粉肥断の製造を業としている。君はそのかたわら馬を飼育して競馬に出場せしめ、三十二歳のころには東京、大阪あるいは遠く浦塩方面まで愛馬を出場させ、

また四十五歳のころには東北や北海道から種馬を買い入れ、あるいは日本競馬会を通じて濠州産の牝馬四十頭を輸入して、県内に頒つこともあった。君はまた造林にも多大の努力を払い、早くも三十歳の時には六十町歩にわたる山林に松、杉、檜を植林し、その間伐木をもって製材業も営んだ。



公職関係にあつては、二十九歳で鹿児島郡会議員に当選して二期を勤め、また前後して谷山村会議員も三期に及び、自治行政への礎石を勤めた。こうして大正八年九月に県会議員に当選し、同十二年九月及び昭和二年九月にも当選して毎期参事会員として県政に参画した。県議会における功績としては産業と道路に見るべきものがあり、産業としては畜産と森林に、道路としては特に鹿児島島の田上線や錫山線の県道開さくが有名である。そのほか、和田干拓地の修理と埋め立てにも力を尽くした。

君は県議在任中に急に死去したが、弟の福留彦左衛門は昭和四年十二月の県議補欠選に当選して、兄弟ふたりの県

芝野盛秀 柿元秀雄	芝野 柿木田	昭和三十年四月 昭和三十八年四月	柿元秀雄 柿木田	昭和三十四年四月
--------------	-----------	---------------------	-------------	----------

桑 鶴 実

和田森山の出身、最後の町長と最初の市長となった人。明治二十八年（一八九五年）九月二十九日―昭和三十七年（一九六二年）六月二十七日。鹿児島商業学校をおえて上京し、苦学して日本大学を卒業した。東京府の職業補導所に助手となって社会問題に興味を持ち、やがてみずから米国に渡り、苦勞を続けながらコロンビア大学の社会科学を学んだ。滞米九か年、三十九歳のころ漂然として帰って来た。帰国後は大河内博士の理化学研究所に入って経理事務を行ない、後に理研の朝鮮鎮南浦工場に総務部長となって終戦を迎えた。引き揚げ後は、鹿児島駐留のアメリカ軍政部の経済技術員に採用され、また理研関係の搾油機械の販売などしていたが、昭和二十六年四月谷山町長選に立候補し、決選投票の末ついに第八代の谷山町長となった。

桑鶴の町長当選には、谷山の自治行政史上に一つの意義を持つものがある。それは、従来の谷山首長が戸長はもとより村長、町長みな郷土出身すなわち土族階級の占有するところであり、この伝統の中に平民の桑鶴が首長となったのは、まさに画期的なできごとである。もともと、四年前の町長選挙には引き揚げ者で平民の黒木弥千代が郷土の元老松元仁市郎と一騎打ちしてわずか数十票の差で惜敗したことがある。黒木は封建性の打破と、鹿児島市との合併や工場誘致を提げて新風を巻き起こしたもので、桑鶴の当選は黒木のバトンを引き継いで立ったものである。



君はその後、谷山の首長に三選して十一年余の自治をつかさどり、多くの功績を残した。その功績の中で大きなものが三つある。その一つは町を昇格して谷山市制を実施したことであり、その二つは町の赤字財政を健全財政にしたことであり、その三つは干拓地を拡張して臨海工業地帯造成の構想を立てたことである。谷山市は昭和三十三年十月一日に誕生し、君は初代市長となった。谷山が市制をしくについては、人口の点からも適切であり、また最後のな全国の町村合併の動きや、市政に対する交付金増額の関係もあつて、市制に踏み切つたものである。臨海工業地帯造成の計画は、前松元町長時代に干拓地として発足したものに、さらにこれを拡張して工業地帯に切り替えようとしたものである。この計画は県とタイアップして中央に申請されたが、これが設定方について力を借したのはわが上松崎出身で当時建設省港湾局長の宮崎茂一であつた。なお桑鶴の市長在任中に鹿児島市との合併も進められたが、実現を見ないで、まもなく市長現職中に心筋梗塞症のため急死した。谷山市では盛大な市葬を営んだ。

君は巨漢でかつぶくもよく、しかも質素にして辺幅を飾らず、またわい談が巧みで人々を笑わせた。昭和四十年六月に君の胸像が一部の有志によつて福祉会館の前庭に建てられた。その台石の背面には、西村一意の撰文で「桑鶴氏は和田の人東都または米国に苦学す昭和二十六年谷山町長のち市制施行と共に初代市長三十七年六月急死卓識力行産業土木教育各般の治績揚り殊に臨海工業地帯建設の大構想を抱く性恬淡質素外柔内剛すこぶる人に敬愛さる」と刻

まれている。

第五章 財界、実業界で活躍した人々

吉 井 友 兄

北麓郷士の出身、日本銀行の理事。文久三年（一八六三年）六月二十六日―昭和九年（一九三四年）二月十七日。明治二十年第一高等中学校を経て同二十三年東京帝国大学政治学科を卒業、谷山からは最初の帝大卒業生で、床次竹二郎、山之内一次、大久保利武などは同期生である。大学を出るとただちに大蔵省にはいり、書記官を拝命して佐賀税務署長その他を歴任し、さらに東京税務監理局長に累進した。やがて、松方正義公の推薦により明治三十二年日本銀行副支配役に就任し、のち同行大阪支店長に栄進した。明治三十七年には日本銀行ロンドン監督役にあげられ、在任二年半、この間日露戦争のため対英外債募集にあたった高橋是清を助けて活躍した。

日本銀行の理事に就任したのは明治三十九年八月であって、大正七年まで十一ヶ年半の長きにわたって理事職にあり、この次には日銀総裁として囑目せられていた。しかるに、大正七年二月脳出血発病のために日本銀行を退くのがむなきに至った。君の日銀における功績としては、各種の規則を作り上げ、特に貸出標準や高率適用を初めて打ち出したことである。



吉井の人物については、その配下であつた梅沢慎六の著わした「今様方丈記」の中にもおもしろく素描されている。その一端を示すと、「悠々迫らず大人の風格を見え、人の長所を挙げて短所を攻めずまた自分の才能を隠して馬鹿にもなられ、常に大所高所から物を見ておられた。それに豪華な半面もあつて、庭園や沓掛石にも金をかけ、盆栽などに至つては逸品多く、病氣引退後は自ら手入れもできないので三井家に譲られ、三井家では今なお珍藏されている」と、書かれている。

吉井一門には、昔から幾人かの人物が出ている。友兄の祖父友矩の墓碑には近藤恒雄の撰文が刻まれ、友矩の二男友輔には甥おひにあたる友兄の碑文がある。友矩は薩英戦争に一番隊として祇園洲砲台戦に功を立て、五十二才にして栢楮掛に任じ、山田村の庄屋ともなっている。友輔は戊辰の役に小番隊小頭となつて奥羽庄内地方に出陣し、後に郡吏となり、さらに戸長ともなり、和田浜の新田工事を督とくしている。友兄の弟の田中友彰は帝大出身で三井物産の参事を勤め、大正十年頃は東京谷山会の会長でもあつた。友兄の二男友武も帝大を出て安田銀行、横浜正金銀行に勤め、のち泉州銀行専務、泉州実業の社長となつた。また友兄の叔母梅子は南麓の永井実美に嫁し、その二男の実治は上野の美術学校第一回生で日本画科を首席で卒業しているが（横山大観画伯はその時次席）、惜しいことに二十六才で亡くなつている。

山下 秀実

辺田郷士の出身、台湾商工銀行の頭取、あるいは帝國製糖会社の初代社長。弘化四年（一八四七年）—昭和四年（一九二九年）。若い時から向学心に燃え、川畑半平翁の辺城学館くんとうに薫陶を受けた。弱冠にして東京に出て、川路大警視のもとに警視庁にはいり、次第に認められて熊本くまもとの警察部長兼熊本県書記官となり、さらに京都府警察部長から大阪府警察部長に累進した。大阪の警察部長時代、内務大臣品川弥二郎の選挙干渉の命を受けてきびしく取り締まったので、国会で三人の警部長が問責に会い、君もその一人としてついに桂冠けいかんした。

官界を退いた君は、日清戦後樺山総督を頼って台湾に渡り、総督府の土木建築の請負業を営み、かたわら台湾日々新聞を発行した。

その後新聞社の方は他人に譲り、自らは台湾商工銀行を設立してその頭取となり、また帝國製糖株式会社の設立発起人となり、商工銀行頭取を辞して帝國製糖の初代社長となった。警察官から実業界への飛躍、これは正に一異彩と云うべきである。大正の初め頃台湾を引き揚げて東京に移り、大森の山王に広大な邸宅を構えて財界人の世話役として暗躍した。明治天皇がかって実業界の有力者十人を召された際、君もその一人に選ばれて光榮に浴した。





塚田喜太郎

山田出身の篤農家で、福島県安積開墾地に農業技術を指導した大恩人年。文政三年（一八二〇年）の生まれ明治二十二年三月七〇歳をもって開墾地に死す。塚田翁が安積開墾地におもむいたのは、同開墾の指導監督であった時の農商務省御用係奈良原繁（鹿児島の人、後に男爵）に従って、明治十六年のことであった。

この安積開墾というのは、安積原野に猪苗代湖の水を引いて開墾灌漑しそこに久留米、鳥取、若松、高知、岡山、愛媛などからの移住開墾を計画とした六百戸移住の七千町歩にわたる政府の大事業である。この大事業は国産奨励と共に、維新後の各藩士族に授産するのが目的であり、当時三百万円の経費をもって施行されたものであるが、いざ移住開墾を始めてみると、鋤鉞を執つたことのない士族では播種、培養、灌漑、收穫などの実業には不知不案内で、篤実なる老農を選んで農事指導を受ける必要があった。

塚田翁は最初開墾地内の久留米地区にあった試験場で各種作物の研究と試作をしていたが、特に籾の実蒔法と骨粉

山下の寵愛した甥に辺田の久留宗一がある。久留は米国ロスアンゼルス市で同郷出身の玉利登司夫、川畑佐平らとはかつて錦江堂なる県人集会所を設け、後には同地の日本人会長ともなった。その間君が中心で羅府報も発行して留いたが、その後満洲に渡つてからは操孤界に入り、奉天や大連で新聞人として健筆を振つた。帰郷後ももっぱら文筆に親しみ、辺田部落史など残している。

肥料の使用を発表し、これを実施して良好の成績を収め、死地にひんした移住開墾者を救い上げた。これによって水田の収穫は増し、旧時三万石の安積産米は大正末期には十五万石の増収となるまでに成長せしめた。復活を得た移住開墾者は喜びに充ちて、その産米を天覧に供した。塚田翁の名譽たるや、もつて知るべきである。

実蒔法と骨粉肥料によって窮地を救った塚田翁は、単に移住者の恩人であるばかりでなく、その篤実熱心な農事改良の成績は少くとも安積農業界の先達として尊敬されている。翁の功績をたたえるために、老農塚田喜太郎之碑が明治二十二年に従四位奈良原繁の撰文によって、安積開墾地内の試験場附近の老松の下に建っている。この碑文を示すと

老農塚田喜太郎之碑 (原文は漢文)

「穀雨下種梅雨挿秧は農家の常套なり而して乾田を創め播種成秧灌水の法は鹿兒島人塚田喜太郎君より始まる君は初め老農として余(奈良原繁)の聘に応じて茲土に寄寓するや力を開墾に致し收穫歳に倍す近傍視て倣う君常に墾地の秧田を苦み百万焦慮す一旦悟る処あり遂に之の法を創め墾田に試すに効驗較著なり新旧農戸来りて法を取る者趾相胥みまなり明治二十二年官は其篤志を嘉し三香木盃を賜い以て之を褒す開墾地各鄙人以て勤勞農事に居り簡易播種法を創めて其恵に頼る者実に多し相共に謀りて碑を建て以て之を表す因つて書を其蔭に梗すと云う。」

また明治三十五年二月安積郡長成田直忠によって、翁の頌頌碑も建てられている。これによると

老農塚田喜太郎翁碑 (原文は漢文)

「翁は鹿兒島県谷山村山田の人、資性忠懇、農業に精通す、夙に島津斉彬公の擢する処と為る、農政に従事すること多年、元治元年西武田村(鹿兒島市の武方面)に沮洳を排して溝渠を通じ良田数町を穫たり、慶応元年牟田池(谷山

の中村)を埋めて沃田若干町を得たり、或いは水難を救護し或いは貧人を賑濟す。明治三年郡宰の命を受けて肝付原(大隅)を拓き移民安堵す、称して谷山農場と曰う、以下略

これを見ると、翁は安積開墾に功績があつたばかりではなく、郷土や近隣にも農事指導者として数々の業績を残していることがわかる。なお、藩公(島津)よりも褒状が次の通り下賜せられている。(原文は漢文)

谷山山田村塚田門名頭 かじみよが 喜太郎

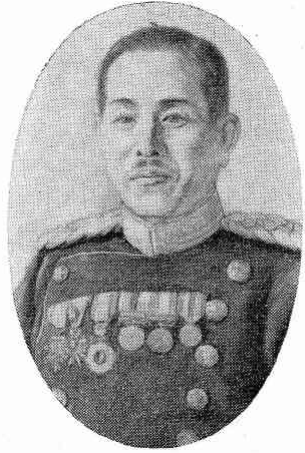
右の者農業方出精致し其外何篇心掛け村中に亘つて困窮の者共へ飯米など貸与え且つ昨年水難の砌も防方抜群相働候段相聞得旁寄持成心入に候此旨地頭前より褒め置かれ候様申渡す可く候 正月 竜衛

塚田翁は約七年の間安積開墾地にあつて、ここで亡くなり、喜悅院釈善種義讚清居士の法名で郡山竜角寺に葬られている。郷里の山田には分骨された墓がある。中山小学校の校長であつた有村栄助は追悼会において、竜角寺の鈴木信栄和尚から遺族の塚田喜左衛門(孫)に送られた書翰を印刷して配布した。また大川才次先生は児童に「公益」の教材として翁を顕彰した。

翁の安積開墾の事績は、大正十五年五月郡山市の追悼会が発版した「安積開墾大観」に詳細記述せられている。

山下 佐太郎

錫山の出身、元陸軍中佐で、朝鮮における運輸業界の第一人者。明治十年(一八七七年)九月十九日―昭和三十三年(一九五八年)五月五日。十七歳の時、現金三円と米三升を携えて郷里を出発し、途中旅費も無くなったので山口県都濃郡の三井鉱山の坑夫となり、居ること約半年三十円の金もできたのでめざす東京に向つた。東京では牛乳配達人



が痛み出したので軍籍を退いた。

となつて働きながら苦学を続け、十九歳の春陸軍士官学校に入学し、後に将軍となつた荒木貞夫、真崎甚三郎、松井石根らと共に第九期生として卒業した。君はさらに砲工学校にはいり、三十五年には大尉に進み、日露戦争には第七師団砲兵中隊長として旅順の二〇三高地を攻略し、さらに奉天の大会戦にも奮闘した。三十九年には士官学校の教官に任ぜられ、北白川宮殿下の教育掛を拝命した。四十一年に少佐、大正三年に中佐に昇進した。しかるに君は戦時中に被つた負傷の箇所

静養のかいあつて健康を回復した君は、昭和五年頃朝鮮に渡つた。世は正に軍国時代で、政府は朝鮮満州北支にわたり広大なアジア政策に力を注ぎ、朝鮮は日本本土と満州、北支を結ぶ物資輸送の重要な陸柵であつた。陸軍は朝鮮鉄道はもちろん、これと併行して朝鮮運送会社の育成に乗り出した。君は内地の日本通運や朝鮮運送に多くの知人を持ち、特に朝鮮運送の萩原社長に信任厚く、当時京畿道、江原道、忠清南道、同北道を網羅する朝鮮トラック運輸の専務取締役^{トクサツ}に挙げられた。昭和十二年日支事変の勃発を見るや、君は支配人大小田友一（現今鹿児島いすずの専務）をして業社合同による京江トラック運輸会社の創設に成功した。またトヨタ、ニッサンの国産車の登場に伴い、君は松方五郎と連携して朝鮮に国産自動車株式会社を創立し、自らその社長となつた。君はさらに天津にも営業所を設けて軍の物資輸送にあたり、また昭和十六年にはトヨタ、ニッサン、いすずの車を朝鮮全島に配給する販売会社を創

立してその社長となった。

君の手掛けた事業は他にもある。富平に車輛用スプリング工業や朝鮮自動車工業を創設し、また軍需工場として精密機械の製作にも乗り出した。君にはさらに大きな夢があり、朝鮮に広大な自動車組立工場を、また来るべき時代の平和産業の樹立を企図した。しかし終戦と共に引き揚げて指宿に住し、泉熱利用の園芸と製塩に雄心を慰め、あるいは錦江会館なるものを建てて文化運動を興さんとした。志半ばにして病に倒れたが、指宿には自動車工業界の名士の訪問も絶えなかったという。通俗教育普及編に「赤手空拳奮斗より成功へ」と題して、山下佐太郎の業績が讃たたえられている。

是 枝 定 助

上松崎横町の出身、大連を根拠として活躍した実業家。明治十七年（一八八四年）—昭和六年（一九四四年）十二月十七日。眉目秀麗の少年であったが、腕白小僧すももで角力にも強く、商家の子でありながら庭先きに菓丸示現流の平木打もやっていた。鹿児島商業学校を卒業すると、志を支那大陸に注いで天津に渡り、まず軍属となって支那語を修得し、のち迎えられて大連の大倉組出張所に雇われた。君は資性俊敏にして情誼ざいに厚く、計数に秀でて商才を発揮し、ことに対華商取引に至っては君の右に出ざる者はなかった。拮据きつこ十二年、大連における大倉組の次長となってその基礎を築いた。

君は一社員をもって満足せず、鴨緑江製材無限会社の経営をまず引き受けた。一方是枝商会なるものを起し、あるいは石綿会社を創設して金州石綿の輸出入を行い、あるいは奉天に高粱酒醸造会社を設立して高粱酒を内外に売り、



是 枝 定 助

あるいはドロマイト（一種の粘土）を発掘して九州の八幡製鉄所に供給するなど、多方面にわたって産業の開発に努力した。これらの事業はいずれも成功して大連に一大基礎を形成し、是枝の名前は三州人の間だけでなく、大連における邦人の間に重きをなした。

君はまた、大連在留の三州人が四千あるにかかわらず社交クラブなきを遺憾として三州クラブを新設した。大正十四年大連に市制の布かゝるや、君は三州人に推されて高点で市会議員に当選した。趣味としては獵銃や乗馬を得意とし、大連競馬クラブの理事に挙げられて産馬改良にも尽力するところがあつた。君はまた郷里の者を大連に呼んで、多くの人々の世話をした。負けず嫌いで仕事熱中の君は遂に病魔の冒すところとなり、大連星ヶ浦の大和ホテル別荘や、長崎県愛野村に保養したが、遂に世を去つた。君に今少し寿を籍したならば、ますます大実業家として名を馳せ、念願として秘めていた代議士にも出馬したことであろう。

上 村 政 吉

和田塩屋の出身、砂糖取引業界における権威者。明治十九年（一八八六年）一月十八日―昭和三十九年（一九六四年）五月十七日。焼酎醸造屋の息子として育つた君は鹿児島商業学校を卒業して、神戸の貿易商として有名な鈴木商店に入社した。鈴木商店では砂糖部に席をおき、まもなく建設中の同店北九州の大里製糖所に転じた。その後、砂糖生産地の台湾に渡り、さらに同店ジャバ支店支配人として赴任した。ジャバはキューバと共に世界の主要なる砂糖大生

産地で、世界の砂糖貿易はここを中心として行われ、君はその第一線に立つて縦横の手腕を振った。当時鈴木商店は赤字で苦境にあつたが、君のジャバにおけるもうけで鈴木商店発展の基礎をつくった。帰朝するや君は大阪支店長に挙げられ、ここでも砂糖取引業界に頭角を現わした。

すでにその頃の鈴木商店は三井、三菱と共に日本の三大貿易商であり、砂糖、樟脳、小麦、鉄材などの取引高は日本一と称せられ、スエズ運河を通過する万国商船の積荷の十%は鈴木の商品と言われていた。第一次世界大戦後の比類まれな大恐慌によつて流石の鈴木商店も大打撃を受くるに至つたので、ここで君もやむなく鈴木商店を退き、独立の第一歩を踏み出すこととなつた。君の独立は砂糖問屋としての田屋商店設立であつて、大阪市南区塩町通二丁目に店を置いた。設立当時君は無一文であつたが、大日本製糖会社社長藤山雷太（自民党領袖藤山愛一郎の父）が上村なら資金を提供しようということに金を借り受け、大阪商人の土性を發揮して營々として田屋商店を築き上げた。現に田屋商店は大日本製糖の特約店であり、日本でも指折りの大手筋問屋である。また大阪砂糖取引所の大仲買人であり、その取引高も高位を占めている。

昭和十九年大東亜戦争による企業整備のために、田屋商店も一時解散したが、同二十六年ふたたび田屋商店（株）を開設して社長となり、渾沌たる砂糖業界に幾多の困難を克服して社運の隆盛を築くと共に、業界発展のために砂糖元売制度を復活して安定を図るなど多くの功績を残した。およそ砂糖取引にして君の関与しない団体は



なく、常に卓見をもつて業界を指導した。嗣子一郎は現に田屋商店の社長である。

第六章 地方産業功労者

川畑亭介

辺田出身の郷土、初め警察官、のちに殖産興業に尽力す。弘化三年（一八四六年）七月十六日―大正十年（一九二一年）十二月。幼名を真太郎と呼び、長じて清純と称したが、後に亭介と改めた。王政維新には戊辰の役に出陣し、会津に幕軍を破つて武勲を立てた。君の書いた「陣中日記」は、その武勲を物語っている。西南の役には西郷軍に投じたが、役が終わると東京に出て警視庁巡查となり、その後熊本警察署、大牟田警察署など勤め、警部に進んだ。

官を弁してからは郷里に帰り、殖産興業を企図して農村の経済開発に努力した。ラミー栽培をいち早く導入したのも君であり、荒蕪地ぶを開いて桑の新種を移植したのも君であつた。また養魚に資材を投じ、あるいは黒糖製造を起し、あるいは繩筵じりの機械製造も始めた。常に率先して農村の産業開発に献身した君は、同時に郷土農村の先覚者であつた。

海老原為治

北麓出身の郷土、北海道開拓の屯田兵ともなり、実業を重んじた人。安政四年（一八五七年）―昭和十三年（一九三八年）七月十四日。もともと貧乏士族であつたので、青年時代三ヶ年を屯田兵として北海道開拓に従事した。西南の役



海老原為治

には西郷軍に従い、八代に奮戦して左手に傷を負って帰郷した。

明治二十二年自治制の実施に伴い、君は学務委員に挙げられ、以来村会議員、郡会議員となり、明治三十六年には県会議員に当選した。

しかし君の本領は実業にあつて、町農会長、産業組合長として尽力し特に谷山中央耕地整理にはその組合長として立派な功績を残した。

君はまた町の実業家八色彦次郎と結んで、谷山における煙草と塩の元売捌人（まききん）となつて商才を発揮した。さらに特筆すべきことは、君が造林

狂と称せられたほど造林に熱中し、その植林面積は百數十町歩の広きにわたり、谷山の山と云えば「海老原の山か、山の海老原か」と呼ばれたものであつた。

八 色 彦 次 郎

松崎横町の出身、商業と水産業に功勞のあつた人。慶応三年（一八六七年）九月二十一日―昭和三十六年（一九六一年）五月十二日。小学校の開設と共に第一回の入学生で、卒業すると授業生（べい）となつて母校に数年教鞭を取つた。のち谷山村役場の書記となり、前後十数年を戸籍、兵事、学務、産業に携わり、役場の生き字引として、しかも模範的な吏員として町民にも親しまれた。

役場を辞してから麓の海老原為治と協同して煙草と塩の専売品元売捌人として活躍した。この間やく十年、それより魚類問屋を一時開業し、発動機船も買入れて漁業経営に乗り出した。当時谷山の発動漁船は三十余隻に上り、君は



有馬 壯 吉

武左衛門の長男として生まれ、明治十五年有馬善太郎の家を継ぎ、錫山小学校を終えて数年同校の授業生をしていた。君が錫山鉱業所に入ったのは明治十九年二月で、分折係や庶務係を経てから、技手兼主任となった。同鉱山がその後鹿児島野上商店の経営に移った時も鉱業部長の要職にあつて、専心鉱山の経営にあつた。

明治四十年六月に鉱業部長を勇退しているが、その後は錫山部落の世話人となつて、厚生に産業に尽力している。昭和七年の錫山産業組

有馬 壯 吉

錫山のために活動貢献した産業人。慶応二年（一八六六年）九月十日―昭和三十一年（一九五六年）十二月。川越



八色 彦 次 郎

選ばれてその発動船組合長となった。この間また鮮魚保存のために製氷会社を慈眼寺の軍馬跡圃に設立し、専務取締役から社長になった。また谷山信用組合の設立せらるや専務理事に挙げられ、その任にあること九年、今日の谷山農業協同組合盛況の基礎を作った。君はまた松崎の松青学舎の副会長として、その後あるいは谷山商工会の顧問として尽力するところ多く、町の長老として尊敬された。

合の設立を初め、郡畜産組合の世話役、養蚕実行組合長、町農会連合小組合長、錫山校後援会長、愛国婦人会相談役の公職にあつて、功労顕著なるものがあつた。郡会議員にもいちどなつてゐるが、錫山に電話を架設し、あるいは錫山小学校の増改築を行うなど、錫山の発展に力を注いだ。錫山を発見した八木主水佑元信と共に、君は錫山の大家として仰がれている。

内村直次郎

上福元惣福の出身、幾多の公職を有しながら郷土農産業の発展に尽くした人。明治元年（一八六八年）一月二十五日—昭和十五年（二九四〇年）十二月六日。二十三歳で早くも村農会議員当選を振出しに、以来村会議員、郡会議員（三期）、市郡畜牛組合評議員、県農会議員など大小幾多の公職を歴任して、自治行政に農業振興に貢献するところ大であつた。その功によつて、明治四十三年には谷山村農会長に挙げられ、以来昭和六年四月まで二十三年に農村指導の任にあつた。

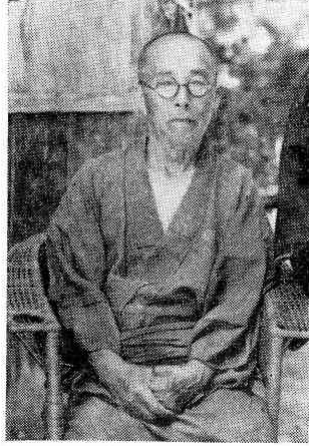
農会長就任と同時に谷山の煙草耕作組合長も兼任したが、大正四年十二月には君の苦心に成る部落の産業組合の設立をみ、君はその組合長となつて、今日の西上福農協の基礎を作つた。君はまた耕地整理事業を起し、あるいは四カ所にわたつて国有林の払下げを実現するなど多大の功績を残した。君が生前において、郡農会より三回、県農会より一回、大日本農会より一回、専売局より二回の表彰を受けていることは、君が郷土にあつていかに農村建設に尽力したかを証するもので



ある。

瀬戸口長右衛門

中の上西出身の農家で、産業に尽くした素封家。明治七年（一八七四年）一月七日―昭和二十二年（一九四七年）二月二十九日。常に郷里にあつて農業に従事したが、瀬戸口家は在^{ざい}有数の資産家で、君も若い頃から長者の風があつた。一族みな繁栄して、しかも四隣に徳望あり。君はまた特に社会公共のために尽力し、推されて町会議員ともなり、さらに郡会議員ともなっているが、農村開発のために尽くすところが多かつた。



瀬戸口長右衛門

堀山に八十町歩の山林を有し、財産の保持と増殖に成功した。ある時は中の芋た。君が郷中に残した功績は、他に率先していち早く中産業組合を成立せしめたことである。この組合は、今や名実共に県下有数の農協となり、内容の充実と運営の宜^{よろ}しきとは同業の齊しく認めるところである。君は敢えてこれを誇るを好まず、多年組合長の職に在りながらその功は人に譲っていた。徳望家として産業功労者として、また郷中の長老として親まれた。

岩崎栄二

もとの出身で、のち柏原に移り、企業家として活躍した実業人。明治八年（一八七五年）―昭和八年（一九三三

年)七月、父の武吉は西南の役に西郷軍に従って出陣し、二十一歳で戦死している。栄二は中山小学校、谷山高等小学校から熊本医学校に学んで業を終えた。海外雄飛の志に燃えて満洲に渡らんとしたが、下関で病に伏し帰郷のやむなきに至った。帰郷後は医を嫌い、実業界に身を転ぜんと決意し、これから谷山や鹿児島の実業界に縦横の敏腕を振った変り種である。

明治三十五年頃から肥料商を営み、ついで材木商に転じさらに土建業を兼営した。四十一年から大正二年にかけては鹿児島市洲崎で製材工場を開き、蒸気機関による六十馬力の機械製材を始めたが、これは県下における機械製材の元祖である。大正六、七年には宮崎県の小林に二十町歩の山野を開墾し、一里の山奥から水を引いて整地灌漑せんとするものであったが、個人の資力ではおよばず完成を見ずして中止した。しかしコンクリート製品の製造業や慈眼寺彼岸田の鯉の養魚業は成功した。また土建業として主なる請負工事には、師範学校、高等農林学校、商船水産学校、川辺中学校、加治木中学校、志布志中学校、鹿児島駅前（ずいじょう）の石造煙草専売局などの建築と、鹿児島駅広木墜道（たいていどう）（トンネル）間の鉄道工事、小林の鉄道工事、都城聯隊の地均、工事、山野林道工事、唐津築港の土木がある。

また関与事業としては、鹿児島電氣軌道株式会社（現在市交通局）の発起人となり、特に鹿児島谷山間の軌道敷地買収を一手に引受けて成功した。さらに古江と志布志間の大隅鉄道会社（現在国鉄）の発起人となり、自宅に創立事務所を置き、東京に赴いて汽車購入にもあたった。そのほか土地の埋立工事にも力を入れ、鹿児島（鹿児島）の天保山から甲突川下流一帯の埋立を行ない、わが谷山の南清見一帯の土地埋立もやった。電車の慈眼寺公園乗入れも企図して村当局と折衝したが、谷山村負担の金額で折合わずして中止した一幕もあった。君は常に時人の意表の上に出て、新事業の

開拓に奔走した企業家であり実業人であった。

無一文から産を成し、明治の末期には多額納税者となっていた。村会議員、郡会議員ともなったことがあり、小学の後援会長や柏原神社の総代ともなったことがある。人と為り豪放磊落で酒を好んだが、一面には情義に厚いところがあり、貧困の人々には生活扶助を与えていた。君の豪勢振りも有名で、ゴム輪の人力車を持ちさっそうとして乗り回していた。当時ゴム輪の人力車を使用していた者は県知事と佐々木病院長のみであったというから、およそ君の豪勢振りが想像される。

芝野森之助



下福元芝野の出身、素封家で、造林事業や柑橘栽培に努力した人。明治十一年（一八七八年）二月十八日―昭和四年（一九二九年）五月十日。父金太郎の長子で、金太郎の兄八太郎の嗣子となった。養父の八太郎は谷山村指折りの資産家として知られ、かつては地租税において鹿児島郡内唯一の多納税者で、谷山に芝野家ありとされた。その養子となった君は、小学校卒業後専ら農業に精励して家業を助けていた。日露戦争には第二軍奥大将の麾下にはいり、首山堡、大石橋、開城、鞍山站などの戦斗に参加して奮戦したが、右大腿に骨折貫通銃創を受けて衛戍病院にて切断するのやむなきに至った。

その後は不自由な身をもって村内幾多の公職を帯び、村会議員にもなつて公共のために尽くしたが、自ら造林事業

に熱中して一時は二十五町歩の山林を有し、また柑橘園を經營して柑橘業の發展を図るなど、殖産興業に力を注いだ。弟の藏助は金太郎の嗣子として骨粉製造業と菜種の搾油事業を営み、また造林業にも精出して、兄弟同じ屋敷に住みながら産業振興に協力した。

第七章 武家郷士と軍人

川上四郎兵衛忠兄

島津氏の支族で名門の出、関ヶ原の戦に大功を立てた武将。元龜元年ごろ（一五七〇年）から慶長時代末ごろまで（一六一四年）の人。川上氏の始祖は、島津氏五代貞久公庶長子頼久であり、弟の氏久は嫡子のために第六代の藩主となっている。こんなわけで川上氏は島津氏の支族で、鹿兒島の名門である。したがって頼久の子孫が越前守や上野介として、あるいは左近将監や掃部介として島津氏の股肱こもろとなっていたことはいうまでもない。特に川上家は薩藩における剣術の大家で、真心影流および天真流の師範家であったことも有名である。鹿兒島の樋之口町には五葉松の川上殿道場が大正時代まであり、また谷山の慈眼寺の奥には川上氏の分家があつて、大正中期ごろまで剣道を指南し、麓や町の青年が通つたものである。

ここに掲げる四郎兵衛忠兄ただえは島津義弘公に従つて関ヶ原戦に出陣し、義弘公の血路を開いて大功を立てた武将である。島津勢は前面の井伊直政、松平忠吉の徳川軍に當つたが、小早川秀秋の裏切りによつて豊臣軍は壊乱敗走した。こ

の壊乱にあつて義弘公はわずか四、五十騎を率いて敵將福島正則の前面陣頭を突き破つて出た。敵將井伊直政は百騎を従えて義弘を追尾し、義弘もいよいよ危いと思われた。この時、四郎兵衛は家来の柏木源藤に鉄砲で井伊を撃ち落すように命じ、種子島銃はみごとに井伊の左股を貫き、鎧の大袖にも当つて馬は棒立ちとなり、井伊は墜落して絶命した。これによつてさすがの井伊勢も追撃をやめ、義弘公は鹿児島に帰還することができた。その鉄砲は今でも川上家に保存されており、また義弘公からの論功行賞感状も残っている。

川上四郎兵衛忠兄を谷山郷土誌に出したのは、直系の子孫川上矢吉が谷山の山田谷に現住しているからである。氏は大東亜戦争直前に鹿児島から山田谷の部落に移住され、ここを永住の地として定めている。この山田谷には昔から川上氏の広い山林があり、また赤松城のあつた所で、川上氏とは特に因縁が深い。山田谷の川上家には系譜はもとより、貴重な古文書や有名な書画、刀剣や鉄砲、古器物や珍什など、かず多くの文化財や逸品が残されていて、さすがに名門の跡を偲ぶに足るものがある。川上家の墓所は涙橋の上であり、その広大な墓地には松方正義公をはじめ名士の献燈石碑が多く並んでいる。

名 越 高 朗

南麓出身の郷土藩の軍務や谷山郷の年寄を勤め、また学識者で「高朗日記」や「耕作万之覚」の筆者として有名な人。文政十年（一八二七）十月七日―明治三十九年（一九〇六年）九月十日。幼名を平八郎と呼び、通称を源左衛門といい、高福の嫡子である。資性高まいで学識がひろく、一生の間に約六十人の弟子があつたという。二十六歳で与頭助となり、後に与頭や横目ともなり、文久三年の薩英戦争には年寄助で谷山の守備につき、その翌年には郷土

年寄になつてゐる。

明治二年には谷山における藩の常備隊小隊長を勤め、藩の政務にも関与した。これより先、安政四年には藩命によつて江戸薩摩屋敷の警備に任ぜられたことがあり、「武蔵国江羈旅日記」が残つてゐる。高朗の書いた「高朗日記」は藩の役職としての勤務日記であり、特に薩英戦争における谷山方面の戦況がくわしく述べられてゐることで貴重な文献であり、また郷士としての日常生活もつぶさに書かれてゐるので、藩政時代における郷士生活については得がたい文献である。さらに、高朗が年寄勤務中に著わした「耕作万之覚」は、ひろい農業知識と農耕の実際を書いたもので、当時の谷山の農業を知るうえにきわめて有益な資料である。

高朗はまた和歌をよくし、八田友紀なども歌会をたびたび催してゐる。是枝柳右衛門とも親交があり、ともに歌をよんでゐる。柳右衛門が高朗と交つたのは、高朗が江戸の薩摩屋敷にもいて上方かみかたの事情にくわしかつたので、それを知ることにあつたのであるが、同時に文学の友として身分は違ひながらも高朗に近づいたのである。柳右衛門の和歌や俳句はたんぎくとなつて、今でも名越家に多く残つてゐる。また、柳右衛門の著わした「夷国人に対する意見書」や「海防急務論」の原稿も名越家に所蔵せられてゐる。高朗の墓は南麓の多福庵にあるが、その墓側には長野祐兼ほか五十六名の弟子から献燈一基が寄進されてゐる。高朗の弟は高倫であり、高倫は麓にあつた藩の第十五郷校の教師として有名であつた。なお高朗の子は高典であり、高典の妻は松田為綱の娘であり、岳父の松田為綱は松方正義の従兄弟いとこに當つてゐる。

松田為徳

南麓出身の郷士、西南の役に出陣し官軍のために、谷山で捕縛されて惨死した豪者。天保十一年（一八二八年）—明治十年（一八七七年）。幼名を金八、号を東園と称した。漢学に精通し、能書家としても知られていた。西南の役には私学校党に属して肥後の八代で奮戦したが、負傷のために帰郷のやむなきに至った。坂之上の二松迫ふたまつぎの仮屋に療養していると、そこに官軍海兵隊が踏み込んで仮屋に発砲した。昼寝していた為徳は銃声に目をさまして庭に飛び出し、海兵隊と取り組んで頑強に抵抗したが、負傷の身でしかも多勢のために押えられ、繩掛けのまま引かれ、浜の前に石の沈みをつけて投げられたと伝えられている。頭目の風ぼうをそなえた肥満の偉丈夫松田為徳の墓は、一族の墓地である常楽寺に石垣を巡らしてひときわ目立っていた。

松田氏は谷山における名門の一つで、その祖先は清和天皇の六孫王経基から出ており、経基から五代目の義忠は相模国足柄郡松田郷に住したので郷名をとって松田姓とした、これが松田氏の初代である。初代から十八代の筑前守松田為信は日向から薩摩に入って島津氏に仕え、城南のわが谷山に住んだ。その後は代々谷山郷士の年寄格として重きをなした。「町口の松田どん」なるものが、この松田氏である。為徳は第二十五代為法の四男であつて、兄弟に為静、弥左衛門、兼周、為綱、為常がある。祖父に当る第二十四代為周の弟為親は坂之下和田名に分家した後、夫婦で鹿児島の松方家を継いで、名も正恭と改め、ここで松方正義公を設けたのである。このことは、松方正義伝に詳しく述べておいた。

大脇為政

南麓出身の郷士、宝蔵院流の槍の達人で寺田屋事件にも参加した勇士。天保八年（一八三七年）―明治四十五年（一九一二年）四月。通称を仲左衛門といい、幼時から武芸に長じ、特に槍は宝蔵院流を極め大刀打は神陰流を得意とした。また忍術も巧みで、地上から屋根に飛び上ることもできた。武芸にすぐれていたため藩に重宝がられ、江戸の薩摩屋敷詰めともなり、久光公の江戸参府にはいつも随従を仰せつかつていた。

為政が江戸詰めになったのは二十二歳ごろで、幕府の対外軟弱政策や安政の大獄に物情騒然たる時代であった。為政はこれらの情勢を国元にいた是枝柳右衛門にもたびたび通報しているが、柳右衛門の井伊大老暗殺の決意は一つに為政の示唆にもよるものといえる。寺田屋事件の時は柳右衛門はまさきに大阪に上り、大阪から為政に手紙を送って上阪を促している。やがて為政は有馬新七らとともに久光公に随従して江戸に行くことになったが、かねての示合せによって大阪で公の随従から離れ、同志は伏見の寺田屋に集合して討幕の義拳を図つたのである。為政はこの寺田屋において鎮撫士に手向かいもせず難をのがれたが、謹慎を命ぜられた後はまた久光公の江戸上りに従い、帰途神奈川の生麦事件にもその行列の中にあつた。

帰国してからの為政は島津藩の仕官を辞して野に下り、郷里谷山で悠々自適の生活を送つた。君は資性活潑寡欲で常に赤貧に甘んじていたが、明治四年廢藩置県によって戸長役場が各地に置かれるに当り、君は推されて明治六年に谷山郷の五人の戸長の中の一人として就任した。こうしてしばらく村政に励み、特に土木事業に力を注いだ。墓は常楽寺にあつた。

長野 祐通

北麓出身の郷士、文武の道を修めた気節硬骨の士、西南の役には官軍に投じて奮戦した傑物。天保十三年（一八四二年）—明治十年（一八七七年）八月二日。通称を貞太郎、後に才二と改め、善藏の長子で母は伊地知氏であった。長野氏は谷山の名門の一つで、藤原鎌足公の二男房前から六代目の良信が長野姓を賜わり、これが長野氏の始祖になっている。良信から九代目の山城守頼祐は島津氏初代の忠久公に従い、軍奉行として薩摩に入っている。頼祐から十六代目の祐通は島津義弘公に仕えて家老職につき、天正六年には日向佐土原城の攻略が あつた。祐通の子の祐兼は忠豊公に従つて相州小田原に出陣し、また朝鮮征伐にも従軍している。祐兼から祐時、祐泰（万治三年歿）に至っているが、長野氏がいつ誰の代から谷山の麓に住んだかは明かにされていない。しかし上記の系譜が現在北麓の長野家に伝わることから見て、長野氏が旧家名門であることがわかる。

さて、本題の長野祐通の人物について、墓の碑文から伺えば「君は天資豪爽、容貌魁偉にして頗る気節あり。弱冠造士館に学び、文を修め武を練り、長ずるに及び小監となる。明治二年薩藩常備隊の置かるるや君は拔擢されて半隊長となり、同九年には小隊長に進んだ。この間、廢藩置県に際し戸長として四年在職した。明治十年の西南役起るや、君は大義を守り私学校に与せず、閉門して一步も出なかつた。私学校党は怒りて君とその子を幽囚した。私学校党の熊本進発後、官軍鹿兒島に入つて君の囚を解き、東京に連れ去つた。君は征西の命を受け三等少警部として萩原警視の九番小隊に属し、大分県に着いて佐伯村に進軍し、続いて日向の臼杵郡に転戦した。鶴羽峠を越えて鳥平山に至り、三角山の戦場に奮戦して遂に陣歿した。時に三十六才、豊後国海部郡佐伯村に葬つた。その遺髪は故郷に届けられ

て、旧常楽寺先塋の裡に葬られた。この碑文は明治十二年三月吉井友兄（後に日本銀行理事）の謹誌に成るものであり、吉井友輔、伊地知季治、平田宗質ほか三十一名から献燈一基が墓前に寄進せられていた。なお、嗣子武熊は県会議員として活躍したことは別に記する通りである。

黒木実

上福元寺下の出身、満州事変に従軍して万里の長城に一番乗りした歩兵伍長の勇士。明治四十三年（一九一〇年）三月二十五日―昭和八年（一九三三年）四月十日。高等小学校を卒業して第四十五聯隊に入隊し、満期除隊後は大阪の住友伸銅の職工となっていたが、間もなく満州事変のために召集を受けて出征した。昭和八年二月熱河作戦に参加し、続いて長城線に向かったが、この間至る所に敵陣地を奮取し、君の殊勲は一同の知るところとなった。長城冷口の付近の戦闘は彼^{ひが}最後の決戦場として激戦が交えられ、君は万里の長城の一番乗りを敢行して、楼上に日章旗を翻したのである。

当時の模様を軍の記録によつて徴すると、君の属する第二大隊の攻撃前面は敵の要点にして、万里の長城に小銃、自動火器、迫撃砲などたくみに配備し、正面はもとより側面も敵射に有利であり、しかも地形頗る峻嶮にして攻撃前進には非常な危険と苦難があつた。秋山大隊長は前進を激励するも死傷算なく、よつて君の属する第六中隊第三小隊は特に選ばれて第一戦に繰り出された。君の小隊は死角を辿り、敵の十字火及び手榴弾を浴びつつ、長城まで数十米の地点にまで達した。この間黒木上等兵は（隊長殿進みましよう進みましよう）と呼び続け、みずから最先頭に出て猛進した。この決死の奮進により小隊の士気は大いに上り、やがて大隊全線の突撃を誘致するに至つた。いよいよ突つ

込めの令下るや、君は先駆けて先頭に立ち、次は竹之内軍曹以下坂下上等兵、第七中隊長瀨大尉、第二大隊長秋山少佐、前田特務曹長など続いた。先頭に立った君はついに長城の望楼に突入して、一番乗りの名乗りをあげた。君は楼



黒木実

上から「敵は退却、黒木占領」と雄呼び、さらに退却する敵兵を楼上から射撃した。しかし、付近に潜伏せる敵兵が放った一弾は君の頭部に命中し、君は鮮血に染まって万里の長城の露と消えたのであった。君は即日伍長に昇叙され、かつ功六級金鵄勲章八等白色桐葉章を授けられた。君の万里の長城一番乗りの武勲は「満洲上海事変尽忠録」、「満洲上海事変忠勇列伝」、「第六師団陣中美談集」などに麗々しく記載されており、また昭和八年四月二十一日の鹿児島新聞にも「万里の長城一番乗り先望楼に躍り込む」と大見出しでその記事が出ている。君の郷里における葬儀は谷山小学校の講堂で行なわれており、君の墓には鹿児島第四十五聯隊長迎専八の撰文が刻まれてその武勲がたたえられている。

入佐俊家

北麓の出身、海軍航空隊の至宝としてかずかずの戦果を挙げた海軍少将。明治三十五年（一九〇一年）四月二十六日―昭和十九年（一九四四年）六月十九日。県立第二中学校を卒業して海軍兵学校に入學し、のち、霞ヶ浦の海軍航空隊に入り、源田実らとともにその第十九期生として飛び出した。この源田と入佐は海軍航空隊の至宝であって、源



田の戦闘機、入佐の爆撃機はその双壁として航空隊を背負っていた。源田は戦後日本空軍の総帥となったが、入佐は大東亜戦争のマリアナ海域に壮烈な最期を遂げた。胆力と技術と機を見るに敏なる入佐は、日支事変から大東亜戦にかけてかずかずの殊勲を立て、航空の軍神として青史に光っている。

入佐の指揮する海軍航空隊は前後八回の感状を戴き、内三回は君の個人感状になつている。君の戦果の主なるものを挙げると、日支事変の第一回南京渡洋爆撃を始め、大東亜戦にも昆明、蘭洲、成都、重慶など支那全土にわたつて敵を壊滅にひんせしめ大東亜戦の中期にはジャバ沖に米蘭連合艦隊を撃滅した。米蘭艦隊を撃沈撃破したときはその論功が上聞に達し、海軍中佐の身をもつて陛下の謁を賜わっている。

大東亜戦争の後期に入ると攻防その所を変え、米海軍は昭和十九年六月マリアナ海域に進攻してサイパン島に肉迫した。小沢中将の率いる第一機動艦隊の主力はこれを撃滅するために比島を発し、入佐は空母大鳳に乗り込んで決戦に臨むことになった。入佐は空母から次ぎ次ぎと飛び立つ飛行機を指図しながら見ているうち、小松曹長操縦の爆撃機が敵の魚雷を沈めようと機首を旋廻しつつ海中に突っ込んだが、敵魚雷は不幸にも大鳳の胴腹に命中した。いよいよ入佐が飛び出ようとすると敵の爆撃機が大挙して大鳳に来襲し、僚艦の空母翔鶴にも四本の巨大な火柱が立つて沈んでいった。大鳳の甲板は必死で仮修理を済ましたが、まず一番機の着艦が車輪を甲板にぶつけ、とたんに大爆

発が起こって甲板上にあった入佐は海中に投げ出され、一塊の肉片も残さずして深海の藻屑と消えた。

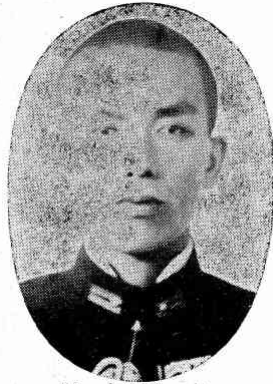


飛行服の入佐中佐

君は資性寡黙沈勇で、部下を訓練するにも細い説明などせず、黙って俺おれに付いてこいというふうで、薩摩隼人の気質そのままなところがあった。また機を見るに敏で、戦況がむずかしいときは最後に出るといふふうであった。大鳳の艦長であった菊池朝三大佐は入佐を「芯の強い責任感の優れた人で、操縦技術は最高であった」と評している。源田は「海軍航空隊仕末記」の中で「有名な蘭州攻撃や中南支方面各地の攻撃で彼の挙げた戦果は実に絶大であつた薩摩隼人の血を引く彼は、我が海軍陸上攻撃隊の歴史を飾る筆頭の勇士である」と激賞している。君は戦功によつて二階級昇進して海軍少将に列せられ、また破格の功二級を追贈されている。入佐少将の功勳は、当時の全国諸新聞に数限りなく掲げられている。また巖谷二三著「中攻」（昭和三十三年四月協同社発行）と、戸川幸太著「悲しき太平洋」（昭和三十八年七月講談社発行）に入佐少将の記事があり、特に「悲しき太平洋」には君の最期を偲ぶ記事がかなり詳しく出ている。墓は北麓の円明庵にあり、武勳をたたえた碑文が刻まれている。

黒木政吉

中組出身の海軍中佐で、大東亜戦争には駆逐隊の先任参謀として活躍し、ついにソロモン諸島海域で散った勇士。明治三十八年（一九〇五年）三月五日―昭和十八年（一九四三年）七月六日。父金次郎の二男で、県立第二中学校を優秀な成績で卒業し、江田島の海軍兵学校でも優秀生として巣立すたった。日支事変には海軍中尉で出征し、上海の陸戦隊



黒木政吉

長として殊勲をたて勇名をとどろかせた。当時鹿児島新聞には「鬼中尉、今年二十七歳、独身で明日をも知らぬ軍人に手足まといの女房など時期尚早なりとし、おせっかいな太鼓持ちどもを痛快に撃退している」の記事も出ている。

それから兵学校の教官となり、さらに海軍大学校に入学して最高の軍事教育を受けた。海軍大学校を卒業した者は、谷山では君が嚆矢（こしや）（はじめ）である。大東亜戦に入ると、すぐ君は選はれて駆逐隊の先任参謀となり、かずかずの武勲をたてながら、ついにソロモン海戦に壮烈な最期を遂げたのである。この戦死に、時の海軍大臣嶋田繁太郎大将は谷山の遺族をわざわざ訪問されて弔意を述べられると共に、「忠誠奮戦殉君国捧黒木政吉君」と直筆の掛軸を下さった。墓は松林寺にあったが、今は万太ヶ宇都に移されている。墓碑には、法名を快樂院秋智隆とし、従五位勲四等功三級海軍中佐黒木政吉と、主なる略歴が刻まれている。

伊地知四郎

南麓の出身、海軍機関少将で自治行政にも功勞のあつた人。明治十三年（一八七九年）一月十八日―昭和四十年（一九六五年）五月十九日。父の季治は初代の谷山村長で、徳望と功績に輝く人である。伊地知家の祖先は孝徳天皇の中間皇子から出ているとされ、熊本県界の真幸に移住した一族が伊地知姓を称し、谷山に来住したのは約三百年前で、その初代は伊地知為衛門季喜になっている。谷山の郷土では、やはり旧家の一つである。四郎は幼時から俊敏をもつ

て聞え、県立第一中学校から海軍機関学校に入り、第十二期生として卒業した。やがて戦艦八雲に乗り込み、日露戦争に従軍した。海軍の現役二十八か年の間に幾多の勲功を立て、累進して海軍機関少将に任じ、第一艦隊機関長兼連合艦隊機関長となった。



昭和六年に予備役、同十二年に後備役に編入、同十七年に退役になっているが、後備役となる直前の昭和十一年七月鹿児島市長（第十二代）に迎えられた。鹿児島市長時代の功績としては、鴨池飛行場、鴨池総合グラウンド、唐湊市営火葬場、市歴史館などの建設や、鴨池海浜病院の平川移転とともにこれを日本赤十字の経営に移管するなど、いずれも歴代市長のでこざった難問題をよく処理した。昭和十六年十月には第六代の谷山町長に推され、五か年間町政を司った。この期間は大東亜戦争と終戦の時期であったので、君は鹿児島県翼賛壮年団長、県協力会長、県統制工業理事などの要職を兼ねた。また戦後にあつては県郷友会の長老となり、援護事業を始め県護国神社に関与し、あるいは自民党県支部役員ともなり、本県の軍人界に、政治界に柱石として重きをなした。常に明治天皇の御影徳を景仰し、晩年には思想の混迷と風紀の頹廢を嘆かれていた。「思の出のまま」

と題する随筆風の自叙原稿が残されており、国を思う憂国の至誠が著わされている。

ここで、**谷山出身の主な陸海軍人**を昭和四十年現在で、左に列記する。ただし紙数の都合で佐官級以上に留めることにした。

階級	氏名	出身	備考
陸軍少将	永谷 静治	辺田	死亡
同 少将	浜田 十之助	上塩屋	死亡
海軍少将	伊地知 四郎	南麓	死亡(人物史)
同 少将	入佐 俊家	北麓	戦死(人物史)
陸軍大佐	桐野 宏	北麓	死亡
同 大佐	勝部 時平	錫山	
同 大佐	川幡 正紀	辺田	死亡
同 大佐	青木 規正	南麓	死亡
同 大佐	松山 宗右衛門	山田	(注あり)
同 大佐	川畑 榮納	和田名	死亡
海軍大佐	山下 深志	南麓	死亡
海技大佐	田中 秀康	南麓	死亡
海軍大佐	水元 秋義	南麓	大東亜戦々死

階級	氏名	出身	備考
同 大佐	山下 正倫	南麓	大東亜戦々死
同 大佐	的場 才造	上松崎	
同 大佐	是枝 頼仲	南麓	
同 大佐	坂元 常男	塩屋	大東亜戦々死
同 大佐	谷口 信義	上福元	大東亜戦々死
同 大佐	瀬戸 熊助	和田	大東亜戦々死
陸軍中佐	山下 佐太郎	錫山	死亡
陸主中佐	青木 巖	南麓	
陸軍中佐	入佐 宗義	柿木田	
同 中佐	川元 浩	柿木田	
同 中佐	畦地 清香	平川	目下自衛隊
海軍中佐	新保 彪三	五ヶ別府	死亡
同 中佐	川畑 卓和	和田	

同少佐	同少佐	同少佐	同少佐	同少佐	同少佐	陸軍少佐	海軍中佐	同中佐	同中佐	同中佐	同中佐	同中佐	陸軍中佐
入佐五郎	島中三太郎	山下清秀	兎玉宗隆	宇木敏行	黒木栄志	永里英一	上村毅	小園義雄	伊東慶治	黒木政吉	伊東藤雄	伊東藤雄	伊東藤雄
下福元	上福元	南麓	上福元	上福元	上福元	下福元	上福元	新入	東麓	下松崎	東麓	東麓	東麓
大東亜戦々死			大東亜戦々死	大東亜戦々死	大東亜戦々死				大東亜戦々死	戦死(人物史)			
同少佐	同少佐	同少佐	同少佐	同少佐	同少佐	同少佐	同少佐	海軍少佐	同少佐	同少佐	同少佐	陸軍少佐	陸軍少佐
岩元正典	田口助次郎	西村国五郎	川畑誠	浜崎藤市	加治屋栄蔵	銀屋温	瀬戸口義雄	森重喜蔵	入来藤森	入佐栄之助	鬼塚一二	鬼塚一二	鬼塚一二
山田	和田	上福元	中	和田	下福元	上福元	中	和田	中	永田	上福元	上福元	上福元
						大東亜戦々死	大東亜戦々死	大東亜戦々死					

注 松山宗右衛門大佐は日支事変に、敵の鉄糸網の爆破口を爆弾三勇士に指示して、この爆破口から敵陣に突入奮戦した当時の中隊長。

第八章 学者・教育者・医師

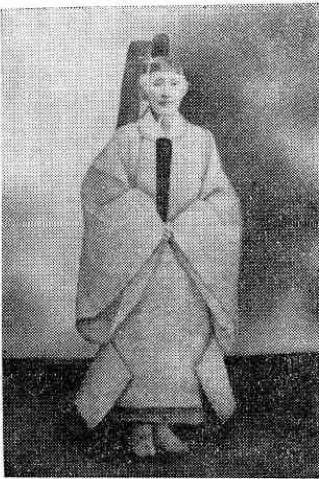
海老原丹堂

南麓出身の郷士、和歌の大家で後に金比羅神宮の宮司。文政三年頃(一八二〇年) — 明治三十六年(一九〇三年)

第八章 学者・教育者・医師

六月十四日。父は金左衛門、母は平川の烏帽子岳神社の第十二代社司鶴田明春の長女美都である。母の美都は故ありて後に喜入の安楽八左衛門兼備に再婚し、ここで警視総監であった安楽兼道を生んでいる。すなわち丹堂と兼道は母を同じくする義兄弟である。

丹堂は若いころから東京に出て勉強し、ついに泰東書院をみずから開いて歌道と書道に精進し、また門弟もとつた。その和歌と書道は堂に入り、ついに明治天皇の皇后の師匠として宮中に出入りを許された。それはいつのころであったか不明であるが、丹堂は明治三十六年八十四歳で死亡しているから、だいたい明治二十年前後かと想像される。晩年には讃岐の金比羅神宮の宮司となり、権中教正の称号も与えられている。



治の三人によつて建てられたものである。

ここで歌の人鶴田海南について付言する。海南は本名を彦二と言ひ、社司第十五代鶴田明徳の二男で「にしき江」を

上の写真は金比羅宮司として風折烏帽子狩衣を着用した丹堂の英姿であり、丹堂の書いた掛軸一幅とともに、平川の鶴田家に所蔵されている。その書幅は藤房江と頭書して「大君の笠置のやまのみかさとも成りしむかしをおもひこそすれ丹堂」と墨こん躍如たるものがある。

丹堂の歌弟子に新井徳之助があり、新井は丹堂の雅号を襲名し、歌集「光明のみめくみ」を著わして師をしのんでいる。丹堂の墓は柏原の自姓院墓地にあつて、昭和十五年五月平井政愛、新井徳之助、平井政

創刊し、海南の歿後もその嗣子鶴田正義（現在南洲神社宮司）によって「にしき江」の歌集は続刊されている。昭和

三十九年三月には「にしき江」創刊五十周年に当たるので、これを記念して「鶴

田 南
田海南歌碑」が社友六百余名によって平川の鶴田家入口に建立されている。「あ
めつちに友ひとりほしかしのみのひとりなりともわれを知る友」の海南の遺詠が
鶴 刻まれており、丹堂とともに平川から歌人の大家の出たことは誇りとするに足る。



谷山の短歌界には「にしき江」同人として宮山法眼、入佐俊光、黒木伊三郎な
どの歌人があつた。また別に西村一意の発行する「郁子」も約十年間続いた。なお、漢詩にはアメリカから帰国の伊
集院宏があり、号を薩峰または六南と称して現在では県下漢詩界の随一と称せられている。

松田為常

南麓出身の郷士、旧第一高等学校教授。弘化二年（一八四五年）六月—昭和三年（一九二八年）。松田氏が谷山郷
士の名門であり、ここから松方正義公の父も出ていること、ならびに為常の兄為徳のことについても、すでに述べてお
いたところである。為常は明治九年二十一歳でアメリカに渡つて、彼地の大学でマスター・オブ・アーツの学位を得
て帰朝した。君がもしアメリカに行かなかつたら西南の役にあるいは西郷軍に投じ、あるいは官軍に属して兄弟互
にしのぎを削つたかも知れない。

帰朝後は東京の第一高等学校の教授となり、さらに同校向ヶ丘五陵の健児舎の舎監ともなつて青年学徒の訓育に当
つた。また島津奨学資金の東京における同学舎の舎監にもなり、鹿児島島の優秀子弟の薫陶に精魂を打ち込んだ。一高



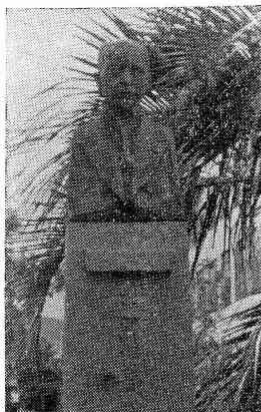
玉利喜造

もと鹿兒島市稲荷町の出身、日本最初の農学博士で、晩年は鹿兒島高等農林学校の校長。安政三年（一八五六年）四月二十五日―昭和六（一九三二年）四月二十一日。藩士の二男として生まれた喜造は、谷山の中の玉利家から士族株を買い、中の母を養母とし、かつ谷山村中千百八十七番地を本籍地としている。

明治十三年三月駒場農学校（東大農学部の前身）を卒業して、同十五年同校の助教授となり、翌年五月農学士第一号を授けられた。明治十八年八月から二カ年米国留学を命ぜられ、マスター・オブ・サイエンスの学位を得、帰途にはヨーロッパの農業を視察した。帰朝するや東京農林学校の教授から農学部長に、翌二十三年六月には農科大学助教授となり、さらに教授に進み、二十九年には藍綬褒章を受け、同年十二月には日本勸業銀行設立委員にも挙げられた。

明治三十二年三月玉利は日本最初の農学博士を授与され、続いて農学博士会長に推薦された。農学博士創設の第一回

の教授在職中に英和辞典を作ったことは有名であり、またアメリカから野球を日本に初めて導入したことも有名である。今日は職業野球が盛んであるが、大正から大東亜戦前までは一高と三高、早稲田と慶応の野球の如きは満天下の興味を呼んだものである。なお、常為田と慶応の野球の如きは満天下の興味を呼んだものである。なお、田文部大臣となった森有礼や、財政金融学の泰斗田尻稲次郎博士は鹿兒島出身の関係もあり、特に親交が厚かった。



鹿大農学部正門の胸像

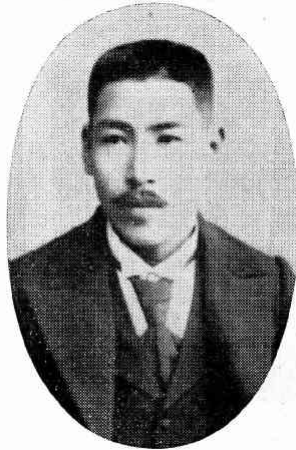
平井政治

に選に入った者は八名で、玉利のほかには新渡戸稲造、古在由直、横井時敏など実にそうそうたる学者であった。高等農林学校が盛岡に初めて設立を見るや、ただちに同校の校長となり、明治四十二年五月第二の高等農林学校が鹿児島に設置されるや迎えられて校長となった。以来鹿児島県の農林畜産のみならず、南方植物の研究も進められて、偉大な功績を残した。大正十一年一月には農学者として初めての貴族院議員にあげられ、同年七月には鹿児島高農の名譽教授となり、正三位勲二等を贈られている。鹿大農学部の正門前には玉利博士の胸像が安藤照の彫刻によって建立されている。

喜造の兄親賢は海軍中将、弟の一誠（沖姓）は東京府土木部長、兄弟三人そろつての親任官である。鹿児島磯の天満宮の院瀬盤（手洗石）に、稲荷町の母玉利茂代が三人の子供の立身を神に感謝した碑文が刻まれている。

北麓郷士の出身、教育功労者。明治元年（一八六八年）二月十五日—昭和十五年（一九四〇年）五月。幼少から学問を好み、明治十一年谷山小学校初等科を卒業するとその翌年十二歳で東京に遊学した。東京遊学は郷党の先輩菅井

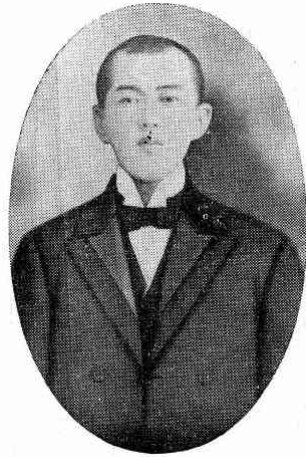
誠美の招くところであり、ここに食客となつて勉学に努めた。やがて鹿児島に帰り、明治十九年鹿児島県尋常師範科に入り、卒業すると直ちに鹿児島郡吉田小学校訓導となり、二十六年には同校の校長を兼任した。それから川辺郡桜山尋高校、枕崎尋校などの校長となり、二十九年四月には谷山母校の森山尋小校の訓導兼校長となり、三十一年六月には鹿児島県師範学校訓導に栄転した。翌三十二年十一月には出水郡視学を拝命し、三十九年には伊佐郡大口尋高の校長となり、明治四十二年十二月の福山尋高の校長を最後に、大正三年教育界を辞した。君は明治三十九年八月実業新聞募集の県下二十人の大教育家に選ばれ、大正三年二月十一日には時の県知事から教育功労者として表彰された。大正六年六月発行の「大日本教育家銘鑑」に「平井先生は自学自習主義に活用的知識と技能を授け、多量を避けて狭く深きを尚び、その訓練上には徳目要項を制定して之が実現に努め、先づ教師の実践窮行の垂範を重しとした。その他家庭教育法や青年子女教養の如き尽すい至らざるはなし」と。彼の令名のうたわるる決して故なしとしない。



平井政治

木原定作

北麓の出身、おぼれる学童を救わんとして殉死した先生。明治二十五年（一八九二年）六月—大正五年（一九一六年）七月十五日、先生を聖職として志望し、鹿児島県師範学校を卒業すると、ただちに日置郡東市来町の伊作田小学校に訓導して赴任した。子弟の教育に懸命の努力を捧げること二年有余、その夏学童にせがまれて江口の浜に海水浴



木原定作

にでかけた。学童が喜々として遊泳しているうち、ひとりの学童が波に呑まれて沖におぼれているのを発見し、間髪を入れず海中に身をおどらして救助に向かった。江口の浜は名だたる難所で、君はさか巻く波にまき込まれて学童と共にでき死し、ついに職に殉じて二十六歳の生命を絶った。木原先生殉職の報は県下はもとより、日本の教育界に甚大なショックを与え、深い哀悼を注がれると共に、教育者の^{きかん}龜鑑として痛く推賞せられた。その殉職のようや、人となりについては、伊作田小学校の校庭に建てられた頌徳碑文や、大正十二年十二月鹿児島県教育会長橋口正治の追悼感状や、十周年に当たって時の校長宮地義朗の祭文などによって、切々として感涙にむせばしむるものがある。郷里の円明庵の墓所にも、東市来有志による「弔義魂」の献燈一基が建てられている。

伊 牟 田 八 三 次

下崎崎の出身、非常な秀才で日本医学会の大家として将来を期待された人。明治十二年（一八七九年）九月十六日—明治四十二年（一九〇九年）十月八日。彼は幼少から英才神童といわれ、和漢の書を愛し、十八史略の如きはたいいて暗誦していた。鹿児島中学造士館において俊秀君の右にいずる者なく、県下随一の秀才とうたわれていた。長崎医学専門学校に入学するや、成績常に抜群で特待生をもつて通した。同校を卒業するとただちに講師となり、また選ばれて京都大学の藤波博士について病理学を専攻した。母校に帰任して助教授となり攻学育英に精励していたが、学と臨



伊 牟 田 八 三 次

床を兼ねべしとして同校を辞した。

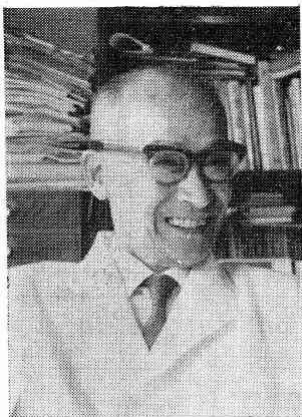
まず、奈良県検疫委員となり、続いて大阪市立桃山病院に入りて腸チブス病主任医となった。診療懇篤をきわめ、よくその任を果たしていたが、たまに病毒の感染するところとなり、三十一歳の若さをもつてその職に殉じた。藤浪博士は君の病重しと聞くや桃山病院にはせつけ、院長の増田博士を促して一命を取り留めるよう懇願され「伊牟田がなくなれば日本医学会

の一大損失である」と言い、増田博士はいよいよ彼の落命に当たり「才子短命は世のならいか、天何んすれぞ伊牟田の命を奪うや」と慟哭どうくされた。大阪の諸新聞は大きな見出しで一週間にわたつて君の長逝を哀悼し、かつ日本医学会のために長文の記事を掲げてその功績をたたえた。

君には「病臥二旬」と題する小著があり、これはその前にジフテリアにかかった時の闘病随筆である。君は号を草庵と称し、詩文に長じてりつぱな和歌もたくさん残っている。徳富蘇峰の「国民の友」誌には草庵の筆名で美文や詩歌がよく載せられていた。松崎の松林寺墓地にあった墓には、長崎医専教授田代豊助博士の撰文が刻まれてあり、君の英才が惜しまれている。

樋渡一夫の兄弟

中の出身、谷山で第一番に医学博士の学位を得た人。明治九年（一八七六年）五月二十日―昭和十七年（一九四二



樋渡吉次 (弟)



樋渡一夫 (兄)

年)十一月七日。君は若いころ鹿兒島の佐々木病院に医師見習いとして勤め、試験合格によって明治三十一年医師免許を得た者であるが、専門は眼科で大正八年四月「トラホームの本態結膜組織学」の言文を京都大学に提出して医学博士となった。谷山で医学博士ができたのはこれが初めて、第二番目は大正九年六月に今井泰蔵が京大に「血液の殺菌作用」の論文で医学博士を得ている。樋渡博士はその後県立病院の眼科部長となり、令名をはせた。

樋渡一夫博士の弟に樋渡吉治博士がある。弟博士は胃腸病の専門大医であり、かたわら県市医師会の役員を兼ね、また学校医として社会公衆医として功績を残している。なお、兄一夫博士の長男正五、二男正七はともに東京にありて医学博士である。弟の吉治博士の長男志良は夭折したが、これも医学博士であった。かくして樋渡一家から五人の医学博士を出しており、原田三兄弟の医博とともに、珍しい存在である。

ここで、**谷山出身または谷山の医学博士**を、その学位を得た年代順に列記してみることにする。(昭和三十六年七月現在)

樋渡 一夫	中	大正八年	今井 泰藏	芝野	大正九年
坂元 宇之助	錫山	大正一五年	樋渡 吉治	中	昭和四年
原田 哲哉	松崎	昭和一〇年	原田 均	松崎	昭和一年
樋渡 正五	中	昭和二六年	樋渡 正七	中	昭和二八年
樋渡 志良	中	昭和二九年	市来 健史		昭和二九年
久留 俊朗	北麓	昭和三〇年	上村 俊夫	和田	昭和三一年
川島 茂雄	中	昭和三二年	今村 邦明		昭和三三年
橋村 敏	錫山	昭和三四年	山下 秀雄		昭和三五年
三宅 力	北麓	昭和三五年	原田 公夫	松崎	昭和三五年
竹之下 克己	南麓	昭和三五年	平山 宗正	東麓	昭和三六年

第九章 篤行、節婦 その他

井原十兵衛

山田の出身、ひとりてこつこつと山田街道をつくった篤行の人。安政五年（一八五八年）―昭和二十二年（一九四七年）三月十四日。貧しい農家で学問も無かったが、天恩を感謝して人のため世のために尽くすことを忘れず、長い間みずから村道をなおして道つくりを奉仕した。昭和二十九年文部省から出された小学四年生用の「道徳の指導資料」書の中に「道をなおして十五年―井原十兵衛の話」と題して篤行の記事が掲げられている。

この篤行記事は、もと谷山村長佐藤清光が大正十三年一月に授与した表彰状に基づくものであるが、この表彰状はやがて宮内省にも達せられ、宮内省は大正十五年五月発行の「大正徳行録」に全国から三百八名（内鹿児島県から五名）の郷土を愛した人々が収録され、この中の井原十兵衛から取り上げられたものである。いま「徳行録」の中からその大要を拾うと「十兵衛はリユマチスを長く病んでいたが全快したので、これまったく天の助けなりと感謝し、何か人のために尽くして天恩に報いんものと思ひ立つた。この頃山田の村道は雨降るごとに損じて人馬の困難ひとかたでないので、十兵衛は毎日法被婆にくわを取り土をならし石を除く作業をひとりてやつていた。道行く人は十兵衛を見て狂人と呼び、子供らは狂人のおじさんと呼んで石を投げるものもあつた。しかし、十兵衛はただ黙々として仕事を続け、五か月を費してつくり上げた道路の長さは一里余り。妻の病氣となるや道普請を中止したるも、妻の癒ゆる

を待って又仕事を続けんとす」となっている。十兵衛のなおした道というのは、いま県道になつてゐる山田街道の一部で、大川内の寺から中山小学校付近に至る区間とされている。この仕事を始めたのは六十七歳からとされているので、普通の人ではできないことであつて、まさに郷土を築く愛郷の篤行者として推賞するに足る。

是 枝 千 亀

中塩屋出身、大の仏教信者で、後世まで生き仏としてあがめられた女史。文政四年（一八二一年）―明治十四年（一八八一年）九月十五日。是枝千亀のことについては、本書の宗教史のなかくわしく取り上げたので、千亀の人物史は宗教史にゆずる。

前 野 力 ヤ



前 野 力 ヤ

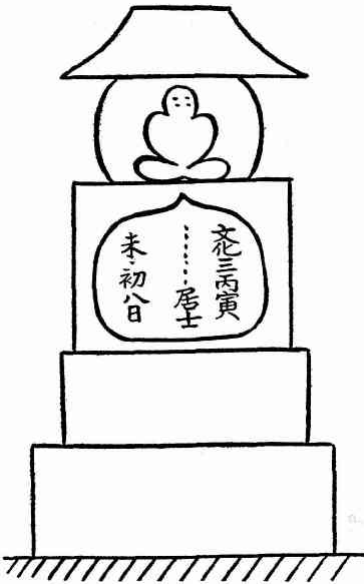
錫山の出身、病身の夫を助け、公共事業にも協力した節婦。明治十年（一八七七年）―昭和三十五年（一九六〇年）十月八日。沼田吉太郎の長女に生まれ、二十一歳で前野清吉にとついだが、夫はまもなく病氣にかかつて身体を自由を失い、貧乏な家計はますます窮迫するに至つた。病夫と姑しゅうとめに仕えること二十三年、看護と孝養の限りを尽くした。

夫と姑の死後は専心家運のばんかに努め、あしたには霜を踏み、夕には星をいただいで働いた。小作農から自作農となるはむつかしいことであるが、女の手一つでこれを実現した。生活には節約を旨としていたが、盆正月や節旬には必ず親戚を訪ね、近隣の交際や冠

婚葬祭にも礼を失することはなかった。また部落の集会や催しがあればまっさきに出て、協力を惜まらずつねに世の師表となった。一家の春風はもとよりで、子女にも教養の手を厚くさしのべていた。鹿児島の諸新聞はカヤ女史の節婦をたたえること一再に止まらず、その間また谷山町長、錫山産業組合から表彰を受け、さらに大正十一年二月十一日には時の中村鹿児島県知事から名誉の表彰を受けた。知事の表彰状には金十円が添えられていたが、カヤ女史はこれを国防献金に寄贈した。

八色 総右衛門

松崎出身、三国山関として有名な力士。出生年月は不明、死亡年月は文化三年（一八〇六年）三月。三国山力士のことは、松崎の松林寺塋域にあった墓によって知るのみであるが、その墓は黄色の山川石で上図の通り豪壮にして風変わりなものである。



この背面に八色総右衛門とあり、向かって左面に力士名の三国山と刻まれている。そのそばに、弟子たちの寄進した建碑一基がすえられており、この建碑には土俵や軍配も刻まれているが、その正面には天保十一年子十一月吉日八千代、布引、大磯の弟子名が記されて、左面に上町頭取松ヶ谷、岩千代、金海、その右面には雲之戸、外力士、その背面は寄進高波、惣五とあつて、弟子や関

係者の名が刻まれている。

三国山がどの程度の強さの力士であったか、大阪や江戸の相撲にも出ていたか、それはわからないが、三国山という力士名は薩隅日の三国で一番強い関取やに聞える。子孫の話を聞くと島津氏の抱え力士で、江戸相撲に島津藩の代表力士として出ていたという。上町頭取松ヶ谷とは鹿児島の上町の部屋の親方とも察せられる。三国山の子は惣五郎であつて、他の弟子とともに惣五として名を連ねている。谷山の弟子で強かつたのは高浪であり、高浪の弟子に浜浪があり、浜浪の弟子には秋風があつた。

このほか、明治中期に地方草相撲で強かつた力士に木之下のイロハ山（福島）があり、また下松崎の湊川（黒木弥兵衛）があつた。

西 謙 蔵

日本陸軍の初代の軍楽隊長、文化二年（一八四五年）四月一日―大正十三年（一九二四年）。鹿児島市稲荷町に新納美庫の三男として生まれ、慶応元年に、西満寿院の養子となつた。謙蔵の妻阿以は谷山村上福元四九八四番地の二、家村彦人の二女であり、こんな関係から、謙蔵はのちに明治三十七年六月に妻の里である前記の処に住み、本籍も谷山に移した。死亡した所は、鹿児島島の島津玉里別邸であるから、西氏は昔から相当の家格であつたと思われる。

氏は、最初横浜軍楽伝習所（横浜郊外妙香寺内）に薩藩軍楽隊長を勤め、のち陸軍教導団（陸軍士官学校前身）に入り、明治三年九月八日隅田川の川口越中島において、明治天皇が初めて観兵式を行なわれたとき、国歌「君が代」を吹奏したことでも有名な人である。すなわち、日本最初の陸軍々楽隊が鹿児島人であつたということは特筆すべき

ことで、多くの将帥を出した鹿児島としても特異な存在である。

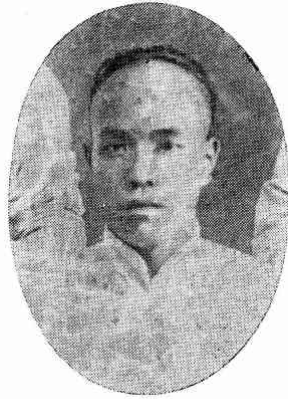
氏が一時住まっていた吉野の居宅址は、鹿児島島の鳥越旧道を市境から二百五十メートルの所にまだ残っている。曾孫の正人は、現在東京都大田区に居住している。

この西謙藏の略歴は「鹿児島之史績」（昭和六年五月発行）と「元帥公爵大山巖」（昭和十年三月発行）から取材した。

小 倉 常 吉

中組の出身で、後に上松崎に移住、ぼっけもんで満洲馬賊の一頭目となって暗躍した怪物である。出生年月は、明治十一年（一八七八年）、死亡年月は不明。高等小学校をおえてしばらく郷里にいたが、その間、麓方の青年と町方は、町方の平民がいつもいじめられているのを憤慨し、この恨みを晴らさんとて麓方の青年たちを東塩屋の戦死墓海岸に誘い出し、ここで町方の青年と果たし合いをすることにし、彼は町方の大将となり拔身の日本刀を振りかざして先頭に立ち、麓方の青年にきり掛かった。麓方はたじたじとなり、あわや血の雨を降らささんとする寸前、麓方と町方の父兄が現場にかけつけ、中に入って制止したので、ついに大事に至らずして引き上げた。彼の豪勇ははなはだ有名で、その後、麓方の青年は彼に一目をおいていたといわれる。

彼はそれから満洲に渡った。それは彼の妹が、大連で時計商を営む松崎出身の寺師正平にとついでいたので、それを頼って行ったのであるが、やがて馬賊の間に仲間入りした。いよいよ日露戦争となるやただちに皇軍に投じ、特務



小倉常吉

機関の用命を帯びて鴨緑江付近に出没した。頭髪を支那式の弁髪に結び支那服をまとって、ある時はロシア軍に近づいて間諜となり、ある時は馬賊を率いて皇軍に協力せしめた。鹿児島の花田中佐（後に報徳会長）は特務機関の総帥格で、つねに満洲の馬賊を操縦して皇国の作戦に寄与するところすこぶる大なるものがあり、辺見十郎太の遺児勇熊も花田中佐の配下にあって特務工作に尽力したことも人々のよく知るところである。わが小倉常吉もまた一頭目として馬賊懐柔に奔走した日露戦役の影武者である。

戦争が終わって、弁髪のまま一度谷山に帰った。町の松青学舎で武勇談を語り、和田浜に草相撲が催されると、飛び入りして強そうな者を片っ端から投げ飛ばした。小舟に乗っては鴨打ちに興じ、ねらいをつけたらはずすことはなかった。町の青年には当時ビールをおこることもあり、なかなかの人気を博していた。再度満洲に渡り、芸妓を妻にして世を送っていたが、満洲事変にも特命を受けて馬賊を指揮した。しかし晩年は落はくして、数奇の運命を満洲で終えた。

ベン・クロキ

アメリカの日系第二世、第二次世界大戦においてイタリ―戦線などに殊勲を立てて、今アメリカの英雄のひとりとしてうたわれている人。ベンにはベンジャミンの略で、クロキは黒木である。ベンの父黒木庄助といい、下松崎の出身である。父の庄助は谷山で漁業をしていたが、二十七才のときアメリカに密航（今から約八十年前）し、ネブラスカ

州の田舎に入つてここで、線路工夫の安下宿業をしたりしていたが、そのうち農園を少し得て野菜や果実をつくつていた。しかしいつも貧乏暮らしで、子供にはろくに学校にも出せなかつた。ベンは十人の兄弟姉妹のなかの四男であつたのである。

第二次世界大戦が始まり、日本もついに米英に対して宣戦を布告した。アメリカの日系人は一時ある所に収容されるのうきめを見たが、そのうち日系人にも義勇兵が募集された。父はベンに向かい「アメリカはお前の国だ、アメリカのために戦うんだ」と励ました。そして、ベンも飛行兵を志願した。それから彼はドイツ、イタリアの爆撃に加わり、いたる所で戦果をあげているが、特にイタリアのナポリ戦線で大功を立てた。

このことはアメリカの新聞やラジオやテレビで大々的に報道せられ、彼は一躍してアメリカの英雄に祭り上げられた。戦いが終わつてアメリカに凱旋すると、彼は將軍らと共に、ある時は学校の講堂に現われ、或る時は映画館に現われて大衆にかつさいを受けた。彼もまた將軍と並んで報告をしたり、講演するなどして大の人気者となつた。

ベン・クロキについて、ラルフ・ジー・マーティンは本を著わし、それが昭和二十二年一月に日本語に訳されて「ネブラスカから来た男」と題して早川書房から出版されている。ベンの人物史はこの訳書によつたものである。この著者の目的はアメリカにおける人種差別に対し、黄色の日系人についても差別のはなはだしい時、ベン・クロキの如きアメリカに忠誠をつくす者のあつたことを広く知らせ、もつてアメリカの人種差別をゆるめんとする意図にあつたものと評されている。したがつて、この著書には小説的な分もあるが、彼が英雄としてさわがれたことは事実である。